

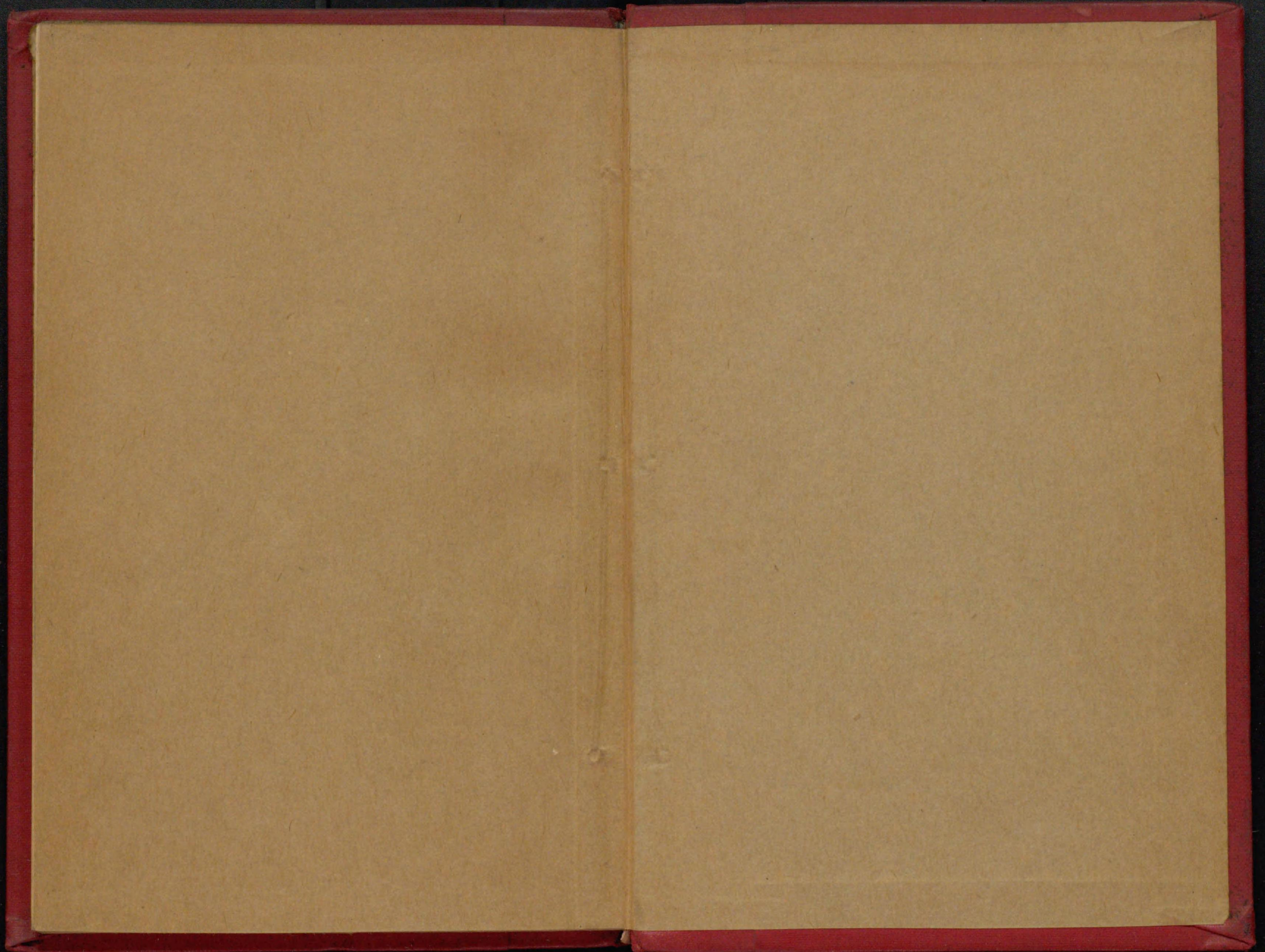
569

569-14



1200501516548

[Faint, illegible text on a vertical strip of paper]



岩波文庫

1519

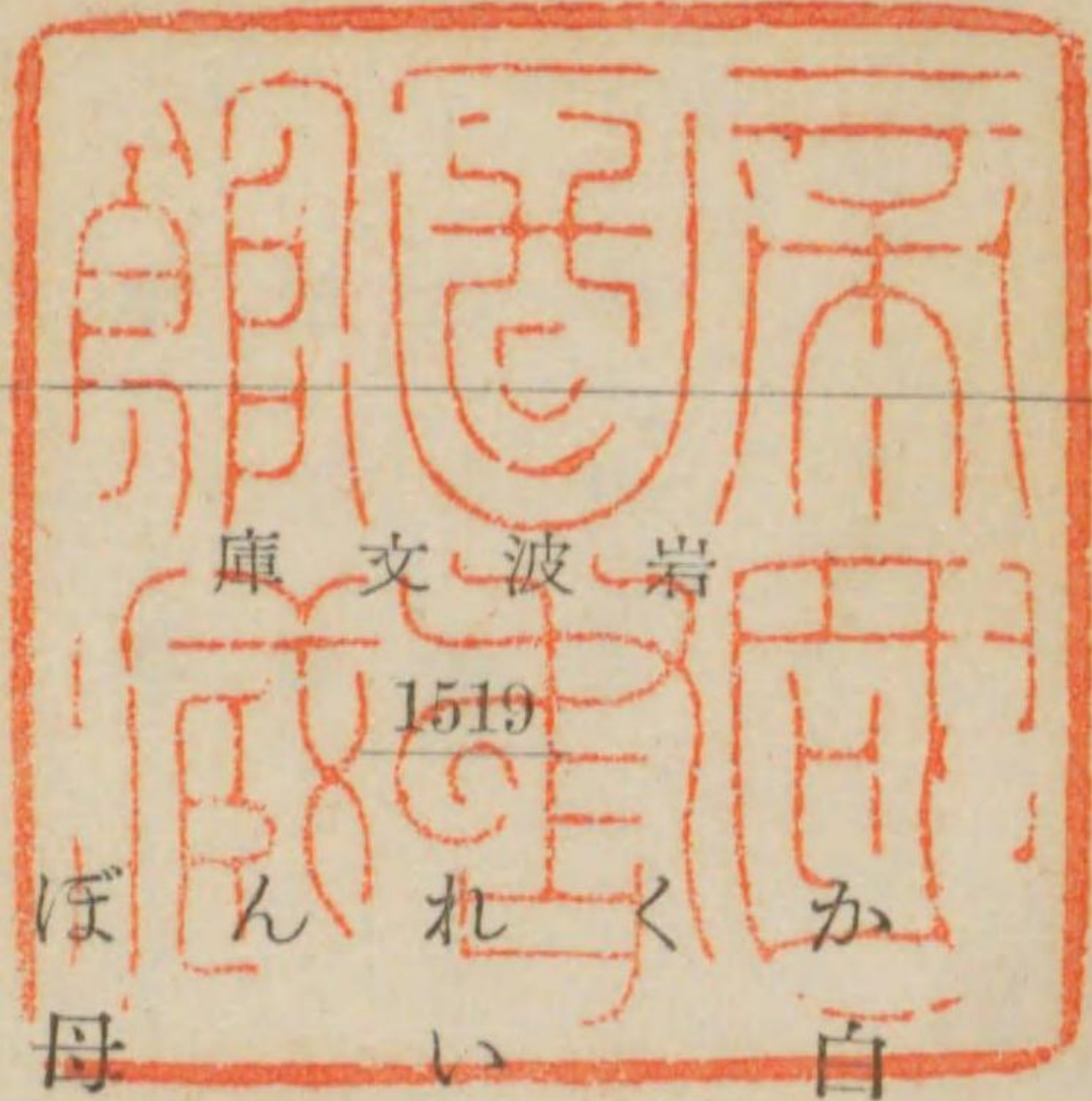
569
14

か くれん ぼ
白 い 母

他二篇

作ブーグロソ
譯郎三省山中

岩波書店



篇二他

作プーグロソ
譯郎三省山中



店書波岩



569
14

3

目次

目	かくれんぼ	五
白	い母	三一
光	と影	五五
小	羊	一〇七
次	あとがき	一二五



かくれんぼ

レレチカの部屋は明るく、美しく、愉たのしかつた。レレチカがよくとほる聲はお母さんを喜ばした。レレチカは——この上もなく美しい子供だった。よそにはどこにだつてこんな子供はゐないのだ。今までだつてあなかつたし、これからだつてありやう筈がないのだ。レレチカのお母さんのセラフィマ・アレクサンドロヴナは、そのことを信じ切つてゐた。レレチカの眼は黒く、大きく、頬は紅らんでゐたが、その眼と來たら、まるで接吻と笑ひのためにつくられたやうなものであつた。けれど、セラフィマ・アレクサンドロヴナにとつて、最も大きな、最もなつかしいレレチカの魅力は、そんなところにあるのではなかつた。

レレチカはお母さんの一人むすめであつた。だからこそ、レレチカの一舉一動がお母さんの心を惹きつけるのだ。レレチカを膝にのせたり、あやしたり、小鳥のやうにはしこくて陽氣なおちびさんをつかまへたりしてゐるのは——何といふ幸福であつたらう！

實をいへば、セラフィマ・アレクサンドロヴナはただ子供部屋にゐる時だけが愉しかつたのだ。良人とは冷たい仲であつた。

それは恐らく、良人自身が、冷たい水だとか、冷たい空気だとか、——概して冷たいものを好むせゐであらう。良人は——いつも潑刺としてゐて冷たく、冷やかな微笑をうかべてゐる、——さうして、彼の通り過ぎたところは、まるで空氣の中を、冷たい流れが奔つて行つたかとさへ思はれる。

ネスレチエフを名乗るセルゲイ・モデストキッチとセラフィマ・アレクサンドロヴナは愛があつて結婚したのではなく、金づくからでもなかつた。ただやむを得ない事情になつてゐたからである。三十五歳の青年と、二十六歳の處女と——同じ社會にあつて、よく教育された二人は一致したのであつた。つまり、男の方は娶らなければならぬし、女は嫁に行く時期が來たのである。セラフィマ・アレクサンドロヴナには、自分が良人を戀慕してゐるやうにさへ思はれて、それが彼女を陽氣にした。良人は粹で、如才がなく、聰明さうな灰色の眼には、いつも意味ありげな表情をうかべ、良人としての義務は、申し分なく優しい態度で遂行してゐた。

セルゲイ・モデストキッチは自分が戀慕してゐるなどとは思はなかつたので、さして陽氣でもなかつた。ただ、穩かで、節度のある生活上の一切のことに同様に、快くは思つてゐた。

花嫁はそれほど綺麗とはいへなかつたが、背は高く、黒い眼をして、髪も黒く、その振舞ひはいくぶん内氣な點はあつたが、その割にはかなり機轉のきく娘であつた。良人は持參金を覗ひなごはしなかつた。——が、女に何かがあると知つては満足するのであつた。彼には身寄りがあるし、彼女にも氣立てがよく、はぶりのきく親戚があつた。何か事のある際には、役にも立つといふ譯であつた。いつも几帳面で、氣轉のきくネスレチエフは職務の方で人に羨まれるほど早くは出世しなかつたが、さればといつて、人を羨むほどおそくもなく——いはば、度を越さず、時機にはづれずといふ風であつた。

二人が一しよになつてこのかた、セルゲイ・モデストキッチは表面にあらはれた行狀では、妻に咎められるやうな機縁はつくらなかつた。ところが、セラフィマ・アレクサンドロヴナが身持になつた頃には、夙くもセルゲイ・モデストキッチには、よそに、一寸した、暫しの關係がついてゐた。セラフィマ・アレクサンドロヴナはこのことを知つたのであるが——驚いたことにはさほど悲しみもしなかつた。彼女は胸に餘る不安の情を忍びながら、生まれるみどり兒を待つてゐた。生まれたのは女の兒であつた。彼女は赤ん坊の世話に身を委ねてしまつた。初めのうちは、彼女も自分を喜ばせるレチカの生ひ立ちを、有頂天になつて、事細かに良人に傳へてゐた。が、間もなく彼女は、良人が自分のいふことを全くうはの空で聞いてゐること、ただ世間並の愛嬌であしらつてゐることに氣がついた。かくして、セラフィマ・アレクサンドロヴナはいよいよ良人から遠ざかつて行つた。誤れる運命に陥つて、思ひもよらない若者ゆゑに良人を裏切るよその女

たちのやうに、彼女は満たされぬ情熱をこめて、女の子を可愛がった。

「お母ちゃん、かくえんぼしよう！」と、レレチカは叫んだ。「れ」を「え」と發音するので、「かくれんぼ」が「かくえんぼ」に聞こえる。

この可愛い舌もつれに心を惹かれて、セラフィマ・アレクサンドロヴナは、やさしく、感動したやうな微笑みをうかべた。レレチカは、可愛い、丸々した足で絨氈を踏みながら駆けて行つて、自分の寢臺のカーテンのかけにかくれた。

「ママ、チューチュ！」と、黒い片方の目で外を覗きながら、やさしい笑ひ聲で叫んだ。

「うちのよい子はどこにゐる？」探してはゐるが見つからぬといつたやうなふりをして、お母さんが訊ねた。

すると、レレチカはそのまま隠れてゐる所で、聲高く笑ひこけた。それから彼女はよけいにからだを乗り出したので、お母さんはたつたいま見つけ出したといふやうに、娘の肩をつかまへて嬉しさうに叫んだ、

「ほら、レレちゃんはどこにゐる。」

レレチカはお母さんの膝に頭をつけたり、お母さんの白い手に抑へられてもがいたりなどしながら、暫くの間、よく徹る聲で笑つてゐた、——お母さんの黒い目は、興奮に驅られて、はげしく燃え立つた。

「さ、今度はママがかくえんの」と、笑ひ疲れたレレチカがいつた。

お母さんはかくれようとして歩き出した。レレチカは見えてゐないやうなふりをして、わきを向いた。ところが、どこへお母さんがかくれるか、こつそり見てゐたのだ。お母さんは戸棚のかけにかくれて、かう叫んだ、

「チューチュ、レレちゃん！」

レレチカはどこにお母さんが立つてゐるか、ちやんと知つてゐるくせに、さつきお母さんがしたやうに、探すやうなふりをして、隅々を覗きながら、部屋のぐるりを駆けまはつた。

「ママ、どこ？」と、レレチカは訊ねた、「ここにはゐない、——ここにもゐない」と、向ふの隅へ駆けて行つていふのである。

お母さんは、髪をふりみだし、壁に頭をもたせて、息を殺したまま立つてゐた。紅い唇には、幸福のうちにも不安を感じさせる微笑みが、ありありとうかんでゐた。

見たところは馬鹿のやうでも、その實、氣立てがよくて器量よしのフェドーシヤといふ保母は、眉をひそめながら、いつものやうに、御主人方の風變りなことには逆ふまいといつたやうな顔附をして夫人を見つめてゐたが、心の中ではこんなことを考へてゐた。

『奥さまつて、まるで子供みたいだわ——まあ、あんなに一生懸命になつて。』
 レレチカはお母さんの立つてゐる隅の方へ近づいて来た、——が、お母さんは遊びに夢中になつて、益々興奮するばかりであつた。お母さんの心臓の鼓動は、いよいよ烈しく、性急になつて来た。彼女は一そらびつたりと壁にからだをおしつけて、自分の髪を揉みくちやにした。レレチカはお母さんのゐる隅の方を窺き込んで、嬉しさのあまり金切り聲を立てた。
 「見ちかつた！」と、大喜びで聲高く叫んだが、「つ」の音がはつきり出なかつた。それがまたお母さんを面白がらせた。

レレチカはお母さんの手をつかまへて、部屋の真ん中へ引つ張り出した。二人とも大よろこびで、散々に笑つた。又してもレレチカはお母さんの膝に頭を投げかけて、廻らぬ舌で、いきもつかずに可愛らしい片言葉をささやいた。

そのとき、セルゲイ・モデストキッチが子供部屋に近づいて来た。彼は閉め切つてないドアのあはひから、笑ひ聲や嬉しさうな叫び、騒ぎまはる音などを聞きつけた。彼は冷やかながら、愛想よく微笑んで、子供部屋に入つて来た。服の着方も申し分なく、すがすがしく、率直な態度で、あたりに清潔、潑刺の感じ、しかも冷やかな感じを漂はしてゐた。賑やかな遊びのさ中に入つて来たのであるが、家の者はあまりにも冷たいその態度に困惑した。フェドーシヤまでが、夫人に對してなのか、自分に對してなのかともわきまへず、きまりの悪い思ひをした。

セラフィマ・アレクサンドロヴナは急に落ちついて、いかにも冷たい態度に變つた。この氣持は娘にも傳はつて、娘は笑ふことをやめて、しげしげと父親を見つめた。

セルゲイ・モデストキッチはさつと部屋の中を見まはした。いつも彼にはここが快よく思はれる。あたりの工合がいかに美しい、——セラフィマ・アレクサンドロヴナは娘のかなり小さい時分から、ただ美しいもので取り圍むことに苦勞してゐる。自分でも派手に、似つかはしい服装をしてゐるが、——これもまた、同じやうな考へから、いつもレレチカのためにしてゐることである。ただ一つ、セルゲイ・モデストキッチに承知できないことがあつた。それは妻が殆んど絶え間なしに子供部屋へ入り込んでゐることである。

「ちよつと、話したいことがあるが、……俺はお前がここにゐるだらうとは、よくよく承知してゐた。」と、彼は嘲るやうな、卑下するやうな薄ら笑ひをうかべて言つた。

二人は一しよに子供部屋を出て行つた。セラフィマ・アレクサンドロヴナを書齋の入口に通して、セルゲイ・モデストキッチは冷やかな口調で、軽く、自分の言葉に重みをつけずにいふのであつた。

「時にはレレチカの傍を離れてゐる方が、あれのためにいいと思はないかな？　それはね、子

供が個性といふものを自覚するやうに。」と、セラフィマ・アレクサンドロヴナのびつくりしたやうな眼附を見て、彼はかう説明した。

「あれはまだ、あんなに小さいんですもの。」と、セラフィマ・アレクサンドロヴナはいつた。

「尤も、これはまあ、俺のちよつとした意見なんだが。何も強ひやしないよ、——あそこはお前の天國なんだから。」

「考へてみますわ。」と、妻は良人のやうに冷やかに、しかも愛想よく微笑みながら答へた。そして二人は別の話を始めた。

二

晩になつて、保姆のフェドーシヤは臺所で、むつつりやのダアリヤといふ小間使と、理窟を並べるのの好きなアガフィヤといふ年寄りの料理番に向かつて、うちの小さいお嬢さんは、奥さまとかくれんぼをしてお遊びになるのが、それはそれは好きなんで、——いつも小ぢやなお顔をかくしなすつては、『チュートチュ』と大きな聲でおつしやるんですと物語つた。

「そして、奥さまつたら、まるでもう子供みたい」と、フェドーシヤは苦がい顔をしていつた。

アガフィヤは話を聞いてゐたが、それはよくないといふ風に頭を振つたが、その顔はいかめしく、人を責めるやうな相になつた。

「奥さまに大したことでないことは分かつてゐるが、」と、お婆さんはいつた、「その、お嬢さんがしよつちゆうかくれんぼばかりしてゐるのは、それあ宜しくないで。」

「え、何ですつて?」と、フェドーシヤが物好きに訊ねた。

お人好らしい彼女の赤ら顔は、この物好きの表情によつて、ぞんざいに色どつた木づくりの人形の顔そつくりになつた。

「え、宜しくない。」と、アガフィヤは確信をもつて繰り返した、「え、ほんとに宜しくない。」

「え?」と、フェドーシヤはその顔により一そう物好きな、おどけた表情を見せながら訊き返した。

「かくれて、かくれて、おかくれになる。」と、アガフィヤは用心ふかく入口の方を眺めながら、こつそりと曰く^{いは}ありげな聲でささやいた。

「まあ、何をおつしやるの?」と、フェドーシヤはびつくりして叫んだ。

「ほんとのことを言つてゐるんですよ。いづれわしの言葉がわかるわな。」と、さも自信ありげに、相變らずこつそりと仔細ありげに言つた、「も、うはや、あれが一ぱんたしかな前じらせだ。」

が、この前兆といふものはお婆さん自身がふつと思ひついたことで、今では、明らかにそれを大威張りしてゐるのである。

三

レレチカは眠つてゐた。セラフィマ・アレクサンドロヴナは、自分の部屋に坐つて、うれしく、優しく、レレチカのことを夢想してゐた。レレチカは彼女の夢想のうちで、しをらしい少女になり、やがてしをらしい娘になり、それからまた魅力に富んだ少女に返つたりしたが、つねに、あくまでも、お母さんのレレチカであつた。

セラフィマ・アレクサンドロヴナはフェドーシヤがやつて来て、自分の前に立ちどまつたのにも気づかなかつた。フェドーシヤは気がかりらしく、びつくりした顔をしてゐた。

「奥さま、あの、奥さま」と、フェドーシヤは興奮にふるふる聲で静かに呼んだ。

セラフィマ・アレクサンドロヴナはやうやくわれに返つた。フェドーシヤの顔は彼女をいたく不安にした。

「フェドーシヤ、どうしたの、お前？」と、彼女は心配さうに訊ねた。「レレチカがどうかしたの？」

彼女は安樂椅子からすばやく立ちあがつた。

「いんえ、奥さま。」と、フェドーシヤは奥さんの氣を鎮めて、席につかせようと手を振りながら答へた。「レレちやまはよう眠つていらつしやいますよ。けど、わたくし、あの、申しあげたことがございまして。あの、うちのレレちやまはいつもかくれんぼばかりなすつて、——あれは宜しくないことではございせんか。」

かういつて、フェドーシヤは、怖ろしさに圓くなつて、じつと動かぬ眸を夫人の上に注ぐのであつた。

「どうして宜しくないの？」と、セラフィマ・アレクサンドロヴナはいつ知らずそこはかとな不安の念に驅られて、忌々しげに訊ねた。

「どうしてといふこともございせんが、やはりどう見ても宜しくないと存じますので。」と、フェドーシヤはいつた。その顔には動かし難い自信の色があらはれた。

「さ、はつきりといつておくれ。」と、セラフィマ・アレクサンドロヴナは無愛想にいひつけた。「私は何もわからないんだもの。」

「はい、奥さま、さういふ前じらせがございまして。」フェドーシヤは急に恥づかしくなつて、

かう説明した。

「馬鹿らしい。」と、セラフィマ・アレクサンドロヴナはいった。

それが何の前兆なのか、また何の豫言になるのか、このうへ訊かうとは思はなかつた。が、怖ろしいといふ譯ではないが、何とはなしに氣味わるくなつて來た、——何かしら、明らかに盲目的なたくらみが、快よい夢を碎いて、たまらないほど心をかき亂してゐることに侮辱を感じ出した。

「たしかに皆さまは前じらせなど本氣にいたしません、けど、ただよくない前じらせで。」悲しさうな聲でフェドーシヤはいった、「お嬢さんはかくれて、かくれて……」

彼女は急に聲をしゃくりあげて泣き出した。

「かくれて、かくれて、さうして、おかくれになつてしまひます。天使のやうなお嬢さまが、じめじめしたお墓の中へ。」と、彼女は、前掛で涙を拭ひ、鼻をかみながら附け足した。

「誰がそんなことをお前に喋つたの？」と、セラフィマ・アレクサンドロヴナはいかめしい、しかも沈んだ聲で訊ねた。

「奥さま、アガフィヤが申しましたの。」と、フェドーシヤが答へた、「もう夙うにアガフィヤは知つて居りますの。」

「知つてゐるつて！」と、セラフィマ・アレクサンドロヴナは見たところ、どうかしてこの思ひもよらなかつた不安を防がうとしてゐるらしく、忌々しげにいつた、「何ていふ馬鹿げたことだらう！ どうぞお願いだから、これから、二度とそんなくだらないことは言はないで。あちらへおいで。」

フェドーシヤは恥をかかされたといふやうな、暗い面持で出て行つた。

『なんていふくだらないことだらう！ うちのレレチカが死ぬなんて、そんなことがあるものか！』と考へて、セラフィマ・アレクサンドロヴナはレレチカが死ぬといふこともありうるといふ考へにとらへられる度に、理性の判断によつて、身にしみる寒けと恐怖を抑へようと努めた。

セラフィマ・アレクサンドロヴナは、この女たちが無學で、そのために前兆などといふものを信じてゐるのだと考へた。彼女はまたあらゆる子供に好かれる無邪氣な遊びと、その子の壽命との間にはなんらの因縁もないことを、はつきりと理解してゐた。彼女はその後、何か別のことに氣を向けようと、一生懸命になつたのであるが、——いつ知らず、心はレレチカがかくれんぼが好きだといふことに向いて行つた。

またレレチカが全くのねんねで、母親と保姆を見知り始めて間もないころ、お母さんをちらと見ると、不意に小ざかしげな顰め面をして、笑ひ出し、抱いてゐた保姆の肩のうしろにかくれた

ことがあつた。それからまた、ずるさうな眼附で肩越しに覗いては、じつと見つめてゐた。つい先ごろは、お母さんがちよつとのあひだ子供部屋を出ていつた留守に、フェドーシヤがレレチカにかくれんぼを教へた。それからといふもの、母親は、かくれんぼをしてゐるときのレレチカがたまらないほどきれいなを見て、自分もまた娘といつしよに遊ぶやうになつたのである。

四

翌くる朝になると、セラフィマ・アレクサンドロヴナはレレチカの世話をやくうれしさに夢中になつて、昨日のフェドーシヤの言葉などは忘れてしまつた。

が、お晝の食事をいひつけに子供部屋を出て行つて、また歸つて来てみると、レレチカがテーブルの下にかくれて、そこから『チューチュ』と呼んだので、セラフィマ・アレクサンドロヴナは俄かに怖ろしくなつた。すぐに彼女はそんなことは根も葉もない、迷信的な恐怖だとして、自分を責めてみたけれど、それでもやはり、かくれんぼをしてレレチカを楽しませることは出来なかつた。さうして、何かほかのことにレレチカの注意をむけさせよ、と努めるのであつた。

レレチカは可愛らしい、素直な少女であつた。彼女は喜んでお母さんの望み通りになる。けれど、もうお母さんの眼からかくれてしまつて、どこか、見えない所から、「チューチュ！」と呼ぶ習慣がついてゐるので、今日も度々それを繰り返した。

セラフィマ・アレクサンドロヴナは強ひてレレチカの興味をひかうと努めた。ところが、それは生易しいことではない！ わけても、不安な、危険を孕む考へに、絶えず妨げられるとき。

『レレチカは何だつて、しよつちゆう「チューチュ」を思ひ出すんだらう？ いつも眼をつむつて、顔をかくすのが、どうして飽きないのかしら？』とセラフィマ・アレクサンドロヴナは考へるのであつた、『うるさく物を見たがるその子のやうに、世間といふものに強いあこがれをもつやうなことが、レレチカにはないのぢやないかしら？』けど、若しさうだとしたら、ひどくからだの弱い徴候ぢやないかしら？ それと知らずに、生きる望みを失つてゐる端緒ぢやないかしら？』セラフィマ・アレクサンドロヴナはかうした妙な豫感に悩まされた。レレチカとかくれんぼをするのをやめてしまふのは、フェドーシヤに對しても、自分に對しても氣恥づかしいことであるが、この遊びが彼女にとつては苦痛になつて來た。やはりこの遊びをしたい心が動くだけに一そつ苦痛であつた。それでゐて、レレチカのところから姿をかくしたり、かくれてゐるレレチカを探したりすることが長いあひだ續いていつた。してはならないと知りつつ、なほ行つてゐる何かの悪事に悩むやうに、ひどく悩みながら、重苦しい心をいだいて、時をり母親自身この遊びを始

めることがあつた。

セラフィマ・アレクサンドロヴナには重苦しい日がやつて来た。

五

レレチカはやすむ仕度をしてゐた。網をはりめぐらしたベッドにのぼつたとき、彼女は疲れてゐたので、すぐに眼をつむつた。お母さんは彼女に空いろの蒲團をかけてやつた。レレチカは蒲團の下から、白い、きやしやな手をさし伸べて、お母さんを抱擁しようとした。お母さんはからだをかがめた。レレチカは眠たげな顔にやさしい表情をうかべて、お母さんに接吻し、やがて枕のうへに頭をさげた。手は蒲團の中にかくれてゐた。レレチカはささやいた、

「お手々がチューチユ。」

これを聞いたお母さんはぎくりとして、動悸がとまりさうであつた。ねてゐる、小さな、か弱い、物静かなレレチカ。彼女は微かに笑つて、眼をつむつたまま、静かにいふ、

「お目々がチューチユ。」

やがてまた、一そ、う静かに、

「レレチカがチューチユ。」

かういつて、小さな、か弱いレレチカは、蒲團にくるまり、枕に頬をおしつけて、寝入つた。お母さんは憂はしげな眸でレレチカを見た。

さうして暫くの間、彼女はいとほしさうに、しかも危惧の念をいだいて、レレチカを見まもりながら、レレチカのベッドのわきに佇んでゐた。

『わたしは母親なんだ、どうしてかははないで居られよう？』と、彼女はレレチカの身に迫るかも知れぬ様々な災厄わざはひを胸に描きながら考へるのであつた。

その夜、彼女は長いこと祈禱をしたが、——彼女の憂鬱は祈禱によつて和げられはしなかつた。

六

それから五六日は経つた。レレチカは風邪をひいた。夜中に彼女は熱を出したのである。保姆のフェドーシヤに起こされたセラフィマ・アレクサンドロヴナがレレチカのところへ行つて、熱があつて落ちつかず、苦しんでゐる子を見たとき、何よりも先に、思ひ起こしたのは、あの不吉な前兆のことであつた、——忽ち彼女は、はかない絶望にとらはれてしまつた。

醫者が招かれた。かういふ場合になすべき手當は、何もかもなされた、——しかも、避くべからざることが、事實となつて現はれて來たのだ。セラフィマ・アレクサンドロヴナは、やがてレチカが元通りに癒つて、また笑つたり遊んだりするだらうとの期待をもつて、強ひて己れを慰めようと努めたのであるが、——さうしたこともつひに彼女には實現しがたい幸福と思はれた！レチカは刻々と弱つていつた。

人々はみなセラフィマ・アレクサンドロヴナをおびえさせまいとして、わざと落ちつきを装つてゐた。然るに、そのまことしやかな顔附が、却つて彼女を憂ひに沈ませた。

「お嬢さんが、かくれなすつた、かくれ！」

フェドーシヤのすすり泣きと、哀哭とが、彼女に死ぬやうな思ひをさせた。

尤も、セラフィマ・アレクサンドロヴナは頭がぼんやりしてゐたので、どんなことが起こつてゐるのか、よく分からなかつた。

レチカはからだ中が燃えるやうな熱で、絶えず氣を失つては囁言をいつた。偶々、意識をとり戻したときには、おとなしく苦痛と疲勞を堪へ忍んで、お母さんに、病氣が重いことを考へさせまいとして、微かに笑ふのであつた。悪夢のやうに惱ましい三日が過ぎた。レチカはすつかり弱り果てた。が、彼女は死にかかつてゐるのが分からなかつた。

彼女はどんよりした眼でお母さんを見て、聞きとれぬほど微かな、嗚れ聲でささやいた、

「ママ、チューチュ！ チューチュしてよう、ママ！」

セラフィマ・アレクサンドロヴナはレチカのベッドのカーテンのかげに顔をかくした。いかにばかりの辛さであらう！

「ママ！」と、聞きとれないほどの聲でレチカが呼んだ。

お母さんはレチカの方に身をかがめた、——レチカはどんよりした眼で、これを最後と、お母さんの絶望した、蒼白い顔を見た。

「白いお母ちゃん！」と、レチカがささやく。

蒼ざめたお母さんの顔は忽ち曇つて、レチカにもあたりが暗くなつて來た。彼女は力なげに蒲團の端を両手でつかんで、ささやいた、

「チューチュ！」

咽喉のなかで、何かさがさと鳴つた。レチカは急に蒼ざめた唇をあけて、また閉ぢた。さうしてあの世の人となつた。

セラフィマ・アレクサンドロヴナはぼんやりと、絶望の念に驅られて、レチカをそのままに、部屋を出て行つた。彼女は良人を迎へた。

「レレチカが亡くなりましたの。」と、彼女は静かな、殆んど響きのない聲でいつた。セルゲイ・モデストキッチは氣づかほしげに彼女の蒼ざめた顔を見た。前には活々して美しかった顔に、今は妙に魯かしげな色がうかんでゐるのに、今更ながら彼は驚かされた。

七

人々はレレチカに死衣を着せ、小さな柩に納めて、廣間に運んだ。セラフィマ・アレクサンドロヴナは柩のわきに佇つて、亡くなつた女の子をぼんやりと見つめてゐた。セルゲイ・モデストキッチは妻の傍に寄つて来て、たわいもない、冷やかな言葉で彼女を慰めながら、柩の傍から引き離さうと努めた。すると、セラフィマ・アレクサンドロヴナは苦笑した。

「あちらへいらつしやいな。」と、彼女は静かにいつた、「レレチカは遊んでゐますのよ。今に起きるでせう。」

「ね、おまへ、しつかりしなくちやいかんよ。」と、セルゲイ・モデストキッチはひそひそと言つた、「運命に従はなければならぬ。」

「この子は起きるでせう。」と、セラフィマ・アレクサンドロヴナは今は亡き子にじつと眼を

こらしながら執拗に繰り返した。

セルゲイ・モデストキッチは氣づかほしげに振り返つた。彼は不體裁な、笑止なことでも起こりほしくないかと危ぶんだのであつた。

「さ、しつかりしなくちやいけない。」と、彼はまた言つた、「そんなことは奇蹟だよ、二十世紀の今日、奇蹟なんてものはありほしない。」

かういひながらも、セルゲイ・モデストキッチはいま現に起こつたことと自分の言葉とがそぐはないのをおぼろげに感じた。彼は氣まづくなり、忌々しくもなつた。

彼は妻の手をとつて柩のわきから離れた。セラフィマ・アレクサンドロヴナは別に逆ひもしなかつた。

彼女の顔は落ちつき拂つてゐるやうに見つけられた。その眼は無愛想であつた。彼女は子供部屋へいつて、生ける日のレレチカがかくれんぼをした場所をあちらこちら窺きながら、歩き出した。テーブルの下やベッドの下を窺くために身をかがめながら、部屋中を歩きまはつて、嬉しさうな聲で附け足した、

「うちのよい子はどこだらう？　うちのレレチカはどこにゐる？」

部屋をぐるぐる廻りながら彼女はまた捜し始めた。フェドーシヤは陰鬱な面持で、身じろぎも

せず片隅に坐つて、びくびくして夫人を見守つてゐたが、やがて不意に泣き出して、聲をあげて喚いた、

「お嬢さまがかくれなすつた、かくれなすつた、天使のやうに可愛いお嬢さまが！」

セラフィマ・アレクサンドロヴナはぎよつとして立ちどまつたかと思ふと、狐につままれたやうにフェドーシヤを見てゐたが、自分も泣き出して、靜かに子供部屋を出て行つた。

八

セルゲイ・モデストキッチは葬式をいそいだ。彼は妻の身の上を案じてゐたのだ。セラフィマ・アレクサンドロヴナが不意の悲しみによつて非常なショックをうけたことを承知してゐるので、彼女の理性を危ふみながら、妻の氣を晴らして慰めてやるには、早くレレチカの葬式を済まさないければならないと考へたのであつた。

翌くる朝になると、セラフィマ・アレクサンドロヴナはことさら念入りに着飾つた。——それといふのも、レレチカのためであつた。廣間に入ると、彼女とレレチカの間には大勢の人がゐて、司祭や補祭が行つたり來たりしてゐた。青い煙がただよつて、香のかほひがしてゐた。セラフィ

マ・アレクサンドロヴナは頭の中に鈍い重味を感じながらレレチカの方へ近づいて行つた。レレチカは、ひっそりと蒼白な身を横たへて、あはれげに微笑んでゐた。セラフィマ・アレクサンドロヴナは柩の端に頬をつけて、ささやいた、

「うちのよい子よ、チューチュ！」

子どもは應じなかつた。セラフィマ・アレクサンドロヴナのまはりには一種の動搖と混亂が起こつた。縁もゆかりもない、無用な人が彼女に挨拶した。誰かが彼女を支へた、——さうしてレレチカはどこかへ運ばれて行つた。

セラフィマ・アレクサンドロヴナはすつくとからだを伸ばし、途方にくれて、深い溜息を洩らし、微笑をうかべて聲高くいつた、

「レレチカや！」

レレチカは運び去られた。母は絶望的な哀哭とともに、柩に身を投げかけたが、つひに制せられたのである。彼女はレレチカを運んでいつた戸口の方へ、まつしぐらに駆け寄つて、床ゆかのうへに坐つて、戸の隙間を窺きながら、かう叫んだ、

「レレチカや、チューチュ！」

やがて彼女は戸のかげから首を出して、笑ひ出した。

白
い
母

ぼんれくか

30

レレチカは母親の許から、そそくさと運び去られた。葬列はまるで脱兎のやうであつた。

復活祭が近づいてゐた。エスペル・コンスタンチノーキッチ・サクサウロフは何かそはそはして、惱ましい気分だつた。おそらく、ゴロヂシチエーフ家で、みんなから次のやうなことを訊かれたからであらう。

白 「あなたはどこでお祭をお迎へです？」

い そのときサクサウロフはどうした譯か、返事を澁つた。

母 すると、肥つた婦人で、眼が近く、世話好きな主婦がかういつた。

「うちへいらつしやいな。」

サクサウロフは忌々しくなつた。といふのは、母夫人の言葉につれて、相變らず若い家庭教師と話をしながら、すばやく彼の方をふり向いたかと思ふと、直ぐに眼をそらしてしまつたその家の令嬢に對してではなかつたらうか？

年頃の娘をもつ母親たちは、サクサウロフを見て、適當のむこがねと見做してゐたが、そのことが却つて彼の心を苛立たせた。自分では、既に年の老けた獨身者ひとりものと思ひ込んでゐたからである。

しかも、事實はまだ、やつと三十七であつた。彼はきつぱりと答へた。
「ありがたうございます。けれど、私はいつもその晩は、うちで過ごすことにしてゐますので。」

すると、令嬢がちらと彼の方を見て、微笑みをうかべながら訊くのであつた。

「どなたと？」

「一人ででございますよ。」と、聲に驚きの感じを含ませて、サクサウロフが答へた。

「あなたは——人嫌ひでいらつしやいますわね。」と、ゴロデシチェーフ夫人が、妙な苦笑^{にがわ}ひをしながら言つた。

サクサウロフは自身の自由といふものを尊重してゐた。嘗ては自分も、結婚せんばかりになつたことがあつたが、時折そのことを思ひ出しては妙な氣がするのであつた。今の彼はさして大きくはないが嚴肅な趣味によつて整頓された住居に住みつき、年寄りの家僕フェードトや、亭主に劣らず几帳面で、サクサウロフの食事をまかなふその女房のフリスチーナにも慣れて、——昔の初恋に對する心だてから、結婚はしないことに覺悟を決めてゐたのだ。實際に、彼の心は孤獨な、締りのない生活から生まれた無頓着さによつて冷たくなつてゐたのである。

彼はよるべない身であつた。父も母も夙くこの世を去つて、近親といふやうなものもなかつた。

彼は間違ひのない道を辿つて安らかに暮らし、どこかの役所に勤めて、文學藝術のうち凡ゆる現代的なものに親しみ、エピキュリアンのやうに、生の幸福を享樂してゐた。——尤も人生そのものは彼にとつては空虚な、あてのないものに思はれた。若しも時をり彼を訪れる唯ひとつの輝かしい、清らかな空想がなかつたら、彼は多くの人たちのやうに、全く冷たい人間になつてゐたであらう。

二

花と咲く日を待たずに凋れてしまつた彼の最初の、そして唯ひとつの戀は、ともすれば、夕暮などに、彼を物悲しく、しかも甘い感傷に耽らせるのであつた。五年まへのこと、彼は若い娘に遭つたのであるが、娘はつひに彼の心に消すことの出来ない印象を與へたものである。蒼白い、やさしい、すんなりした、眼の蒼い、薄いろの捲毛をした子であつたが、彼にはこの世のものでなく、運命によつて偶然に、暫しがほどを町の騒音の中に送られて來た空氣と霧の精のやうにも思はれた。彼女の舉止は悠々たるもので、そのやさしい、朗らかな聲は石にはねかかる靜かな流れのささやきのやうに弱々しく響いてゐた。

偶然か否か——サクサウロフはいつも白い着物を着た彼女に遭ふのであつた。白い着物の印象は彼の心のうちで、彼女を思ふ心と一しよになつて離れがたいものとなつた。タマーラといふその名前までが、いつも山の頂きの雪のやうに白いものに思はれた。

彼はタマーラの親たちのところへ姿を見せるやうになつた。そして、夙くも、人間の運命を結びつける言葉を告げようと一度ならず決心してゐた。然るに、彼女の方ではいつもそれを遠ざけて、眸に恐怖と憂愁の色をうかべ、立ちあがつては出て行つてしまふ。それにしても、何が彼女を怖れさせたのであらう？ サクサウロフは彼女の顔にうひうひしい愛のきざしを讀みとつた。その眼は、彼が入つて行くと、にはかに生氣づいて、双の頬には、ほのかな紅がただよふのであつた。

が、或る日の夕方、彼にとつては永遠に忘れることの出来ない或る夕方、彼女は彼の言葉に耳を傾けた。早春のことであつた。河はつい先ごろ氷が解け、木々もやはらかな緑の柔毛をまとつたばかりの頃であつた。町の住居の、ネワ河に面して開放たれた窓のわきにタマーラとサクサウロフは腰をおろしてゐた。サクサウロフは、どんなことを、どういふ風に話したらよいか、といふやうなことには別に氣もとめずに、やさしい、しかも怖ろしい言葉を述べた。そこで彼女は少しく蒼ざめ、そこはかとなく、弱々しい微笑みをうかべて立ちあがつた。彼女のかほそい手は、彫刻を施こした椅子の背のうへに顛へてゐた。

「あした。」と、タマーラは聲低く言つて、部屋を出て行つた。

サクサウロフは永いこと、はりつめた期待を抱きながら、タマーラの見えなくなつた戸口の方を眺めてゐた。すると、頭がくらくらした。眞白なライラックの花の一枝が、ふつと彼の眼にとまつた。彼はなぜかそれを取りあげて、宿の主たちには暇も告げずに立ち去つた。

その晩、彼は寝つかれなかつた。窓ぎはに立つて、宵のうちは眞暗く、後に朝が近づくにつれて再び輝き出した町の遠くの方を眺め、微笑みをもらしては、ライラックの白い枝を握りしめてゐた。やがて、あたりが明るくなつて氣がついて見ると、部屋の床（か）いつぱいにライラックの白い花びらがまき散らされてゐた。それがサクサウロフには、可笑しい、無邪氣なことのやうに思はれた。そのうちに、夜の興奮のさめやらぬ心に、寒けを覺えた。彼は一風呂あびて、やつといつもの氣分にかへり、タマーラの家をさして出かけて行つた。

行つて見ると、彼女は病氣だとのこと、——どこかで風邪をひいたとの話であつた。もうそれつきりサクサウロフは彼女に會へなかつた。二週間経つて彼女は亡くなつたのである。彼は葬式には行かなかつた。彼女の死も、彼の心の安らひを失はせはしなかつた。自分は愛してゐたのか、それともほんの一寸の間の儚ない夢であつたのか、もうそれさへ覺れなかつた。

時として、夕暮などに、彼女のことを思ひうかべることもあつたが、やがてそれも忘れられて行つた。サクサウロフは彼女の寫眞さへ持つてゐなかつた。それから何年か経つた去年の春のこと、食料品店の窓の立派な食料品の中にひとり物寂しく咲いてゐたライラックの花の一枝は、彼にタマーラのことを思ひ起こさせた。そして、その時からといふもの、彼は夕べ夕べにタマーラのことを思ひ起こすのを好むやうになつた。

時として、居眠りをすることがある。すると、夢にタマーラが入つて来て、さし向かひに坐り、しげしげと優しい眸を向けて、何か言ひたさうな様子をする。タマーラの何かをあてにしてゐるやうな眸を胸に感ずることは、どうかすると物憂いこと、怖ろしいことにも思はれるのであつた。今もゴロヂシチェーフ家を去りながら、おつおつと考へる。

『あの子が挨拶をしに来るぞ。』

恐怖と孤獨の情があまりにも痛々しく彼を捉へるので、つひにはこんな風にも考へる、

『この聖い、神祕な夜を、たつた一人で迎へないやうに、結婚してはいけなかな?』

ワレーリヤ・ミハイロヴナ——ゴロヂシチェーフ家の令嬢の名はかういつた——が胸に浮かんだ。彼女はきれいではなかつたが、いつも驚くほど顔に似合つたなりをしてゐた。どうやらサクサウロフに思ひを寄せてゐるらしいから、こちらから求婚をすれば、よもや拒絶するやうなことはあるまい。

街へ出ると、騒音や人の群れに心を散らされて、ゴロヂシチェーフの令嬢についての考へも、いつもの皮肉なニュアンスを帯びて來た。ところで、誰かのために彼がタマーラの思ひ出を變へることが出来るものであらうか? この世のありとあるものが、彼には實につまらない、ちやちなものに思はれて、つひにはタマーラ——ただ彼女ひとり——が復活祭の挨拶に來てくれればよいがと思ふやうになつた。

『しかし、』と、彼は考へた、『彼女はまた、何かをあてにして、おれを見るだらう。白い、やさしいタマーラ、一體あれは何を望んでゐるのか? あれのやさしい唇がおれにくちづけをしてくれるかしら?』

三

タマーラのことを佗びしく空想しながら、サクサウロフは街をぶらつき、往き來の人の顔を眺めてゐたが——大人のごつごつした顔が不愉快であつた。彼は誰ひとり喜んで、しみじみと復活祭の挨拶を交はす相手のないことを思ひ出した。第一日には、たくさんの人が挨拶(譯者註: 接吻の禮)に

来るだらう——ざらざらした唇や、とげとげしい髯や、酒の匂ひが。

若しも誰かを接吻しなければならぬのならば、それは子供にすることだ。子供の顔がサクサウロフには可愛くなつて来た。

彼は長いこと歩き廻つて、疲れて、賑やかな通りの教會の庭に入った。ベンチに腰をかけてゐた蒼白い少年がびつくりしたやうな様子でサクサウロフを見たが、直ぐにまた自分の前をじつと眺め始めた。少年の碧い眼は、タマーラのそののやうに物悲しげで、やさしかつた。少年は足がまつすぐにベンチの前に突き出てゐるほど小さかつた。

サクサウロフは少年と並んで腰をおろし、哀れみを含んだ好奇心をもつて、じろじろと眺め始めた。この一人ぼつちの子供には、何かしら楽しく物を思ひ起こさせ、興奮をさせるやうなものがひそんでゐた。が、一見したところでは、極めてありふれた少年に過ぎなかつた。すり切れた服、薄いろの髪のかぶつた白い毛皮の帽子、足には履き古しのよごれた長靴。

少年は永いことベンチに腰をおろしてゐたが、いきなり立ちあがると、悲しさうに泣き出した。彼は門から通りへ駆け出したが、やがて、つと立ちどまり、向ふ側へよろめいて、またそこで立ちどまつた。見たところ、どこへ行つていいのか分からぬらしかつた。彼は聲も立てずに、ひっそりと、大粒の涙をこぼしながら、泣き出した。人々が集まつた。巡査がやつて来た。みんなが

少年に向かつて、家はどこかと訊き出した。

「グリーンフンち。」と、子供は廻らぬ舌で、まだはつきりしない子供らしい口調で答へた。

「どこの町の？」と、巡査は訊ねた。

しかし、子供は町のことは知らないで、ただ繰り返すばかりであつた。

「グリーンフンち。」

白

若い陽氣な巡査はちよつと考へて見て、この近邊にそんな家はないと決めてしまつた。

い

「ぢやあ、おまへ、誰んところにある？」と、氣むつかしげな顔をした職人が訊いた、「おまへのお父ちゃん、誰つての？」

母

「お父ちゃんゐない。」少年は泣きはらした眼で、人だかりを見廻しながら答へた。

「お父ちゃんゐねえ。なあるほど。」職人は大眞面目に言つて、首を振つた、「ぢやあ、お母ちゃん、誰つての？」

「お母ちゃんゐんの。」と、少年がいふ。

「一體、誰つてのさ？」

「お母ちゃん。」と、少年はいつて、ちよつと考へてから附け加へた、「黒いお母ちゃん。」

群集の中で誰かが笑ひ出した。

「黒い？」

「何、それが苗字かな？」氣むづかしげな顔をした職人は當て推量をした。

「もとはお母ちゃん白かつたの、でも、今は黒いの。」と少年は説明した。

「まあ、いい、訊いても分からん。」と、巡査はひとり決めしてしまつた、「これは署へつれて行かにやらん。署へ行つて電話で照會することにして。」

巡査は門の方へ寄つて行つて、ベルを鳴らした。そのとき、一人の門番が、巡査の姿を見かけて、箒を手にしたまま、門の中から出て來るところであつた。巡査は門番に、子供を署へ連れて行くやうにといひつけた。が、子供は不意に何か考へたと見えて叫び出した、

「いいから放して！え、自分で見つけるよう！」

彼は門番の箒に度膽を抜かれたのであらう。また、實際に何かを思ひ出したのであらう、——兎に角、駆け出したので、サクサウロフは危ふくその姿を見失ふところであつた。尤も、子供は間もなく落ちついた。彼はあちこちと駆けめぐつては、自分の家をさがし、しかも、見當らぬままに街々をさまよひ歩いた。サクサウロフは無言のまま、少年のあとをつけて歩いた。彼は子供と話す術もわきまへなかつたのである。

つひに、子供は疲れてしまつた。彼は街燈のほとりに立ちどまつて、柱に背をもたせた。その眼には涙が光つてゐた。

「可愛い坊や」と、サクサウロフは言葉をかけた、「一體どうしたんだ、お家がまだ見つからないの？」

子供は物悲しげな、やさしい眼で、無言のまま彼を見やつたが——忽ちサクサウロフは、かやうに執拗に、少年のあとをつけさせたものが、何であつたかを諒解した。この幼い漂泊者の眸にも、顔にも、何ものが、タマラと著しく似かよつたものを感じさせるところがあつた。

「ねえ、坊や、名前は何ていふの？」とサクサウロフは胸をわくわくさせながら、やさしい聲で訊ねた。

「レーシャ。」と、少年はいつた。

「それぢや何だな、レーシャ、お前はお母ちゃんとしよにゐるんだね？」

「さう、お母ちゃん。でも、そのお母ちゃんは黒いお母ちゃんなんだよ、もとは白いお母ちゃんだつたけど。」

サクサウロフは黒いお母ちゃんといふのは繼母だらうと推量した。

「ぢや、どうして迷ひ子になんかかつたの？」

「ぼくね、お母ちゃんとあるいてたの。ずつとあるいてたの。そしたらお母ちゃんがね、ここにじつとして、待つておいでつて、行つてしまつたの。でも、怖くなつちやつた。」

「ぢや、お母ちゃんの名前は？」

「お母ちゃん？ お母ちゃんはね、黒くて、おこりんぼなの。」

「で、お母ちゃんは何してるの？」

少年は少し考へてみた。

「コーヒーのんでんの。」と、彼はいつた。

「さあ、それから？」

「それからね、よそのうちと喧嘩すんの。」また少し考へてから、レーシャはかう答へた。

「それでは、白いお母ちゃんはどこにゐるの？」

「つれてかれつちやつたの。棺へいれて、つれてかれつちやつたの。お父ちゃんもつれてかれつちやつたの。」

少年は片手をあげて、どこか遠くの方を指したかと思ふと、泣き出してしまった。

『一體、この子は、どうしたもんだらう？』サクサウロフは考へた。

が、いきなり子供はまた駈け出した。いくつかの角をまがつてから、子供は少し静かになつた。サクサウロフはまた子供に追ひついた。少年の顔を見ると、喜びと怖れとが、妙に混り合つてゐた。

「あれなのよ、グリューフのうちは。」と、五階建ての風變りな大建物を指しながら、彼はサクサウロフにいつた。

丁度このとき、「グリューフのうち」といはれた家の門口から、黒い着物に、白い豆模様の黒い布をかぶつた、黒髪の、眼の黒い女があらはれた。少年はおどおどして、ちぢみあがつてしまつた。

「お母ちゃん」と、彼はささやいた。

繼母は彼を見ると、びつくりした。

「このいたづら坊、何だつて、ここにゐるんだ！」と彼女はわめき出した、「あのベンチに腰かけてゐろつて、言ひつけたのに。何だつて、あそこにゐないで、こつちへ來てしまつたんだ？」
彼女はここで、少年を思ふ存分なぐりつけるつもりらしかつた。が、かなり厳しい顔をして、見かけの堂々たるどこかの紳士が、こちらを見つめてゐるのを眼にとめたので、少しばかり物やさしい調子に變つて、口を切つた、

「わたしがあの場合にゐなかつたのは三十分ばかりですよ、それだのに飛び出してしまつて。散散さがし廻つて、足が棒のやうになつちやつたわ。何ていふ悪たれだらう。氣が氣ぢやないわ。」
彼女は大きな手で、子供の小さな手をつかまへて、家の中へひきずり込んだ。サクサウロフは、

その家の番地と町の名をつきとめて、家路についた。

四

サクサウロフは事があると、フェドートの分別のある言葉を聴くが好きであつた。そこで、家に歸ると、レーシャ少年のことを彼に物語つた。

「それは、女がわざとやつたことだ。」と、フェドートは斷言した、「婆め、なんてひどいことをするんだらう！ そんな遠くへ置き放しにするなんて！」

「一體、どうしてそんなことをするんだらう？」と、サクサウロフは訊ねた。

「言はずと知れたこと！ きつと何ですよ、間抜け婆め、かう考へたんですよ、街で迷つたからつて、兎に角、見離される心配はねえ、きつと誰かが拾つてくれるつて。それは繼母に相違はありません。繼母にかかつては、子供なんか不憫がられはしませんからね。」

サクサウロフには信じられなかつた。彼はいつた、

「だつて、それくらゐならば警察に見つかるわけぢやないか！」

「ええ、見つかるでせう。しかし、さうかうしてゐるうちに、あれはきつと、町から全く姿を消しちまふでせうよ。さうなつたら、探したつてしやうがねえ！」

サクサウロフは薄ら笑ひをした。

『たしかに、』と、彼は考へた、『うちのフェドートは豫審判事格だわい。』

その晩、彼はランプのもとで、本を前にして腰かけてゐるうち、ゐねむりをした。すると、白づくめのやさしいタマールが夢にあらはれて自分と並んで腰をおろした。その顔は驚くほどレーシャの顔に似てゐた。彼女は執拗に、まじろぎさへせず、何かを待ちうけてゐた。サクサウロフには彼女の明るい、哀願するやうな眼を見たり、何を彼女が欲してゐるのか、分らないことが、どうにもやり切れなかつた。彼はいきなり立ちあがつて、タマールが腰をかけてゐると覺しい安樂椅子の方へ近づいて行つた。その前に立ちどまつて、彼は大きな、熱情的な聲で訊ねた。

「一體、お前は何がほしいのか？ 聞かしてくれ。」

が、その時にはもう彼女の姿は見えなかつた。

『ああ、夢に見たばかりだ。』と、サクサウロフは物悲しい氣持になつて考へた。

翌くる日、美術學校の展覽會を出ると、サクサウロフはゴロヂシチェーフの家の人たちに出遭つた。彼は令嬢にレーシャのことを物語つた。

「可哀さうな子供ですこと。」と、ワレーリヤ・ミハイロヴナは低い聲でいつた、「繼母はただもう追ひ出したがつてるんですね。」

「まだ、その邊のところはどうか分かりませんね。」と、サクサウロフは答へた。

彼にはフェードトヤ、この娘や、あらゆる人たちが、この事實を、ひどく悲劇的に見てゐるのが、却つて忌々しかつた。

「それは分かり切つてますわよ。」と、ワレーリヤ・ミハイロヴナは熱心にいふのである、「お父さんがゐない、そして子供が繼母のところにある、すると繼母の邪魔になるといふわけで。早くよくしてやらないと——すつかり參つてしまひますよ。」

「あなたは、あんまり暗く考へすぎる。」と、嘲笑ひの念をうかべて、サクサウロフがいつた。

「なら、あなたがその子を引き取りなすつたら。」と、ワレーリヤ・ミハイロヴナが勧めた。

「ぼくに？」と、サクサウロフは驚きの眼をみはつて訊き返した。

「あなたはおひとりでいらつしやる。」と、ワレーリヤ・ミハイロヴナが根氣づよく言葉をついだ、「ほかにはどなたもいらつしやらない。復活祭のためにお手柄をなさいました。接吻の禮をする相手が出るだけでも。」

「御冗談でせう。ワレーリヤ・ミハイロヴナ、一體どうして私に子供の世話なんか出来るんです。」

「お守を雇ひなさいよ。運命の神様があなたにと下すつたんですもの。」

サクサウロフは呆れて、いつ知らずやさしい氣分になり、令嬢の紅らみを帯びた活々した顔を見まもつた。

その晩、彼は再びタマーラを夢に見たが、その時はもう、彼女の意志を知つてゐるやうな氣がしてゐた。やがて、ひつそりした彼の部屋に、聲ひくく物いふ聲が響きわたつた。

『あの方のおつしやつた通りになさいまし！』

サクサウロフは、大喜びで起きあがつて、片手でまどろむ眼をこすつた。机のうへに白いライラックの一枝を見つけて、彼は驚いた。どこからこんな枝が來たのだらう？ それとも、タマーラが、彼女の意志のしるしとして、置いていつたのかしら？

そこで、ふつと彼は、ゴロヂシチェーフの令嬢と結婚して、レーシャを引きとり、タマーラの

願ひを叶へてやらうかと考へた。彼は嬉々として、ライラックの仄かな香りを吸ひこんだ。不意に彼は、この枝を自分自身が今日、買つて來たことを思ひ出した。が、すぐにまたかう考へた。

『自分で買つたからといつて、そんなことは何の意味もないのだ、——それよりは、これを買はうといふ氣になつたこと、また、そのことを今、忘れてゐたこと、そこにこそ啓示があるんだ。』

六

朝になつて、レーシャのところへ出かけて行つた。折よく門のところでは少年に出遭つたが、少年は自分の住居すまゐを教へた。レーシャの黒い母はコーヒーを飲み終つて、赤い鼻の同居人と口論をしてゐた。そこへ行つて、サクサウロフはレーシャのことを彼女から聞いたのである。

少年は一昨年、母に死なれた。父はその後、この黒い女と結婚したが、一年ほど経つて、今度は自分が死んでしまつた。黒い母のイリーナ・イワーノヴナには、一歳の息子があつた。しかも、彼女は結婚しようとしてゐたのである。結婚式は近いうちに行はれることになつてゐて、式が済むと直ぐに『田舎』へ行くことになつてゐた。そんな譯で、レーシャは彼女にとつては他人であつて、全く必要がないのであつた。

「私にあの子をゆづつて下さい。」と、サクサウロフは申し出た。

「かしこまりました、どうぞ。」と、意地わるく喜んで、イリーナ・イワーノヴナがいつた。

やがて、ちよつと、口を噤んでから、つけ足した、

「ただ、着物代だけは拂つて下さい。」

かうして、レーシャはサクサウロフのところに落ちついたのである。ゴロヂシチェーフの令嬢は、子守をさがすことや、レーシャの身のまはりについての他のいろんなこまかいことにまで面倒をみてやつた。そのために、彼女はよくサクサウロフの家へも來るやうになつた。かういつたことに世話をやいてゐる彼女は、サクサウロフには全く別人のやうに思はれた。恰も、彼女の魂に通ずる扉が彼の前に開かれたかのやうであつた。彼女の眼はかやかしく、優しいものとなり、彼女の全身は、あるときタマーラから感ぜられたと殆んど同様の靜寂の感にみたされた。

七

白いお母さんについてのレーシャの物語は、フェドートとその妻とをいたく感動させた。復活祭の前の週の土曜日に、レーシャを寝かしつけながら、二人はその枕邊に、砂糖の白い卵をぶらさげてやつた。

「これは白いお母さんからいただいたのですよ。」と、フリスチーナはいつた、「でも、ね、今はさはつちやいけないの！ イエズス様が蘇りなすつて、あちこちのお寺の鐘が鳴り出すまでは、これにさはらないことですよ。」

レーシャはすなほに床についた。彼は永いこと、たのしい卵を眺めてゐたが——たうとう寝こんでしまった。

が、その晩サクサウロフはたつた一人で家にゐた。眞夜中ちかくなると、どうにもならない睡氣が再び彼の眼を閉ぢた——やがて、彼は直ぐにタマールに會へるだらうと喜んだ。

果たして彼女は白づくめになつて、いそいそと、祈禱の時を知らせる遠くの楽しさうな鐘の音と共にやつて来た。彼女はやさしい微笑みを洩らして、彼のうへに身を傾けた、——と思ふと、いひ知られぬ喜びが！ サクサウロフは自分の唇のうへに、たとへやうもないほどやはらかな接觸を感じた。やさしい聲が靜かにいふ、

『主はよみがへり給へり！』

サクサウロフは、眼をひらかずに、両手をさし伸べて、やはらかな、すんなりしたからだを抱いた。それはレーシャが彼の膝のうへに這ひあがつて、彼に接吻したのであつた。

祈禱の時を告げる鐘の音が少年の眠りをさましたのである。彼は白い卵をつかんで、サクサウロフのところへ駈けて来たのだ。

サクサウロフは眼をさました。レーシャはにつこりして、白い卵を見せた。

「これはね、白いお母ちゃんが送つて下さつたの。」と、彼は廻らぬ舌でいふのである、「でも、あなたにあげる。そしたら、ワレリヤをばちゃんに上げてね。」

「よしよし、いい子だ、きつとさうするよ。」と、サクサウロフはいつた。

彼はレーシャを寝かしつけてから、レーシャのよこした白い卵——その瞬間、タマールからの贈り物のやうにさへも思はれた白いお母さんの卵をもつて、自分はワレリヤ・ミハイロヴナのところへ出かけて行つた。

光
と
影

ワローヂャ・ロヴレフといふのは、やせぎすで、蒼白い、十二歳になる少年であつたが、今しがた中學校からかへつて来たばかりで、夕食を待ちうけてゐた。彼は客間のピアノのわきに佇つて、けさ郵便局から配達された『ニワ』の最近號を、と見かう見してゐた。

そこにおいてあつた新聞紙のなかから、薄い、ねずみ色の紙に印刷された小さな冊子が床のうへにおちた。それは繪入り雑誌の廣告であつた。見ると、冊子のなかでは、發行人がこれからさきの寄稿者として、五十人ほどの文壇知名の士の名を擧げて、その雑誌を全體的にも各部分的にも言葉をつくして賞めちぎり、繪の見本まで入れてゐるのであつた。

ワローヂャは小さな繪を眺めまはしながら、ぼんやりとこのねずみ色の冊子を繰り始めた。蒼ざめた顔に際立つ大きな眼を、いかにも氣うとげに注ぐのであつた。

そのうちに、或る頁が、不意に少年の興味をひいて、いよいよ彼の眼を大きくさせた。その頁には、うへから下へ、いろんな技法を織りませて、六つの手が描かれ、それらの影は、白い壁に投げられて、暗い影繪を形づくつてゐた。角のある帽子をかぶつたお嬢さんや、驢馬や栗鼠の頭

や、坐つてゐる牡牛や、そのほかの何かこれに類するものの形が。

ワローヂャは微笑みながら、貪るやうにこれらの繪を眺めた。この遊びは彼には前から親しいものであつた。彼は自分で、壁に兎の頭をあらはさうとして、片方の手の指を組み合はせることができた。しかし、ここには今まで一度も見なかったことのないいろんなものがあつた。そして、何より大切なことは——ここに両手を使つてできる極めて複雑な形のあることであつた。

ワローヂャはこれらの影繪を自分でもうつしてみたくなつた。けれど、覺束ない秋の暮れ方のちらちらする光では、何ひとつうまく出てこなかつた。

本を自分のものになければならぬ、どうせこの本はいらないんだらうと、彼は考へた。

ちやうどこのとき隣りの部屋に、母の近づいてくる足音と聲がきこえた。ワローヂャは、なぜか顔をあからめ、大いそぎで本をポケットに突つ込み、母を迎へようとしてピアノのわきを離れた。よく彼に似て、蒼白い顔をし、大きな眼をした母親は愛想よく微笑みながら中にはいつて來た。

母はいつものやうに訊ねた、

「何か今日、めづらしいことがあつて？」

「ううん、べつに何も。」と、彼は顔をしかめていつた。

しかし、すぐに彼は母親に對して、無作法なものの言ひ方をしてゐるやうな氣がして、恥づかしくなつた。そこで彼は愛想よく笑つて、學校であつたことを思ひ出し始めた、——が、そのとき、今更ながらまざまざと、忌々しさを感じた。

「ぼくらの方のブルージニンが變なことをしたんですよ。」と、あまり亂暴なので生徒たちから好かれてゐない教師のことを話し出した、「ぼくら級のレオンチンがお答へをしたんですよ、そして途中でつまつてしまつたんです。そしたらかういふんです、『まあ、よろしい、腰をかける、でくの坊！』つて。」

「でも、お前だつたら、何でもすぐに分かつて答へられるわね。」と、母親が微笑みながらいつた。

「ええ、たいてい。あの先生は、とつても亂暴ですよ。」

ワローヂャはちよつとのあひだ口をつぐんだ。そしてまた、溜息をついて、訴へるやうな聲で話し出した、

「いつも、みんなせかせかしてゐるんですよ。」

「だれが？」と、母親が訊ねた。

「え、先生なの。先生たちはみんな、早く授業をやつて、それでゐて、試験によく出来るやう

に、しつかと復習をさせたがつてゐるんです。若しかして、何かお訊きすると、きつとかう思ふんですよ、生徒たちは、時間を延ばしたり、質問をされないやうに、よけいなお喋りをしてゐるなんて。」

「なら、授業が終つてから話せばいいに。」

「ええ、でも、——放課後もせかせかしてゐるんですよ。うちへ歸つたり、女學校へ教へに行つたりするのに。だから、何でも大いそぎで——地理だと思ふと、今度はもうギリシャ語なんです。」

「氣をつけなくちゃ！」

「ええ、さう。いそがしいつたら。ほんとに、それが僕には癪にさはるんです。」
母親はかすかに笑つた。

二

夕食のあとで、ワローヂャは豫習をするために、自分の部屋へ行つた。母親が、ワローヂャに便利なやうにいろいろ氣をつかつてくれるので、このやうな部屋に當然あるべきものは、すつかり備はつてゐる。ここにはワローヂャの邪魔をするやうな者はなく、母親でさへも、この時刻には彼のところに寄りつかないのである。若しもワローヂャの勉強を見てやる必要があれば、彼女は少しおくれて入つて行く。

ワローヂャは勤勉な子で、噂では才能のある子ださうである。ところが、今日といふ今日は勉強をするのが彼には大儀なのである。どの學課にも手をつけず、何かしら不愉快なことを思ひうかべた。その課目の教師や、教師が通りがかりに言ひすてて、感じ易い少年の心の底に消しがたいものを置いていつた亂暴な毒舌が、今更のやうに胸にうかぶのであつた。

最後の授業には、なぜかしら、いろんなことが、うまく行かないことがあつた。先生は不満の色をうかべ、その仕事はうまく涉らなかつた。先生たちの不機嫌な氣分が、いまワローヂャに傳はつて、書物やノートの頁を見ると、くらい、とりとめのない不安の念を覺えるのである。

一つの課目からつぎの課目へと、彼は性急に移つていつた。が、また明日、『でくの坊』にならないやうに、是非ともやつてしまはなければならぬ小さなことがちらつく。たわいもない、必要なものがちらついて、彼はいらいらした。やがて、退屈と忌々しさにあくびさへも始め、じれつたさうに足をぶらぶらさせたり、居たたまれないやうに體をうごかしたりした。

しかし彼は、これらの學課は全部を必ずやり通さなければならぬこと、またそれが非常に大

切であること、それをやるか否かによつて全運命が決することなど、よくよく知りぬいてゐた。そこで彼は自分に退屈で仕方のないことを、眞面目にやりとげた。

ワローヂャはノートに小さなインクの汚點しみをこしらへたので、ペンをわきへおいた。よく氣をつけて見て、これは必ずナイフで消しとれるものだと思つた。彼は氣晴らしが出来たことを喜んだ。机のうへにナイフはなかつた。ワローヂャはポケットに手を入れて、手さぐりしてみた。普通の子供の例に洩れず、いろんな塵や紙屑のたまつてゐる間に、ナイフをさぐりあてて、それを引つぱつた。すると、一しよに何かの小さな本があつた。

最初は手につかんでゐる紙が何だかわからなかつたが、引つぱり出してみると、すぐに影繪の本であることを思ひ起こして——急にうれしくなつて、元氣づいた。

果たしてこれは——彼が學課をやつてゐるうちに、すつかり忘れてゐた例の本であつた。

彼はいそいで椅子から跳びあがり、ランプを壁のそばへ寄せて、誰か入つてこないかしらと、閉まつた戸の方をおそるおそる横目で見た、——それからその本の、さつき見ておいた頁をあけて、しげしげと第一番目の繪を眺めて、圖の示すところに従つて、指を組み合はせてみた。影繪は最初、うまく出なかつた。彼はランプをあちこちと置きかへて、指を折り曲げたり、伸ばしたりした。かうして遂に、自分の部屋の白い壁紙に、角のある帽子をかぶつた女の首をあらはすことができた。

ワローヂャは陽氣になつた。彼は手をかき上げて、かすかに指のさきをふるはせた。と、首はお辭儀をし、微笑んで、をかしいほど氣どつた顔をした。

ワローヂャは第二圖に移つていつた。それからまたつきへ。どれもこれも、最初はうまくできなかつたが、ワローヂャはどうにかかうにか、やつてのけた。

かういふことをして三十分ほど過ぎ、學課のことも、學校のことも、この世のありとあることも忘れはてた。

不意に、ドアのむかふに、聞き馴れた足音がした。ワローヂャは顔をあからめて、本をポケットにつつこみ、すばやくランプを元のところへかへした。そのとき、ランプをあやふく引つくりかへすところであつた。それから机にむかつて、ノートの上へに、ごごみこんだ。そこへお母さんが入つて來た。

「さあ、むかふへいつてお茶を、ワロヂェンカ。」と、彼女はいつた。

ワローヂャは汚點しみを眺めて、ナイフをあけようとしてゐるやうな風をよそほつた。お母さんはやさしく彼の頭のうへに手をのせた——彼はナイフを投げすてて、眞赤になつた顔をお母さんの胸におしつけた。お母さんは何も氣がつかず、それをワローヂャは喜んでゐるらしかつた。が、

やはり、馬鹿げたいたづらの最中につかまへられたやうに、恥づかしかった。

三

食堂の真ん中にある圓テーブルのうへで、サモワルはしづかに、ぶすぶすと小唄をうたつてゐた。うへからさがつてゐるランプは白いテーブルクロスと、くろずんだ壁紙に、睡たげな感じを與へてゐた。

お母さんはきれいな、蒼ざめた顔をテーブルのうへに傾けて、何か物思ひに沈んでゐた。ワローヂャは片手をテーブルのうへに置いて、匙でコップの中をかきまはしてゐた。甘い流れが茶のうちに漂ひ、かすかな泡が表面にうかんだ。銀の匙がしづかに音をたてた。

サモワルの栓から、たぎつた湯がお母さんのコップに、しゅつしゅつと鳴りながら注がれた。匙から皿へ、皿からカーテンとお茶に溶けこんだほのかな影が走つた。ワローヂャはそれを見つめてゐた。甘い流れと仄かな気泡のうつし出す影の間にあるその影は、何かを思ひ起こさせた——それが果たして何であるかは、ワローヂャに断定できなかつた。彼はこごんで、匙をまはし、指でその匙をあらためてみた、——が、何ひとつあらはれては來なかつた。

『やつぱり、』と、彼は一圖に考へるのであつた、『片方の指で影をつくることはできないんだ。指をみんな寄せるとできるけれど、それも手本に合はせなくては駄目なんだ。』

そこでワローヂャはサモワルや椅子やお母さんの影や、テーブルのうへに投げ出されてゐる食器の影などを覗き始め——これらのあらゆる影から、何かに似た形をつかまうとした。

お母さんが何かいつたが——ワローヂャは空聞きしてゐた。

「ねえお前、今はどんな風に勉強してゐるの？」と、お母さんが訊ねた。

ワローヂャはこのとき牛乳罐の影を眺めてゐた。で、彼ははつとして、大いそぎで答へた。

「猫にそつくり。」

「ワローヂャや、お前はすつかり眠つてるのね。」と、呆れてお母さんがいつた、「猫つて何さ？」

ワローヂャは顔をあからめた。

「どうしてこんなことになつたのか分かりません。」と、彼はいつた、「御免なさい、お母さん。聞いてゐなかつたんです。」

翌くる晩、ワローヂャはお茶を喫む前に影繪のことを思ひ出して、またやり出した。一つの影繪は、どんなに指を伸ばしても曲げても、うまく出て来なかつた。

彼は影繪に夢中になつてゐたので、お母さんがやつて来るのにも気がつかなくつた。お母さんがドアをあける音を聞きつけて、彼は本をポケットにおしこんで、どぎまぎしながら壁のところを離れた。しかし、そのときお母さんは彼の手を見てしまつてゐた。彼女の大きくあけた眼には、怖れにふるふる狼狽の色がうかがはれた。

「何してるの、ワローヂャ？ 何をかくしたの？」

「いいえ、なにも、ほんとに」と、顔をあからめ、氣づまりさうに、もちもちしながらワローヂャが呟いた。

お母さんにはどうしたわけか、ワローヂャが煙草を吸はうとしてゐて、見つけられたので煙草をかくしたのだといふ風に思はれた。

「ワローヂャや、すぐお見せ、かくした物を。」と、彼女はおびえきつた聲でいつた。

「ほんとに、お母さん、何も……」

お母さんは彼の肘をつかまへた。

「わたしがお前のポケットへ手を入れたらどう？」

彼は一そう顔をあからめて、ポケットから小さな本をとり出した。

「これです。」と、彼は本をお母さんの方へ差し出しながらいつた。

「まあ、一體これ何？」

「ええ、これはねえ」と、ワローヂャは説明した、「ここに繪があるんです。ほら、ごらん下さい。影繪ですよ。さあ、僕は壁にうつして見せませう。だけど、僕がやつてもうまく出ないんですよ。」

「まあ、それなら何だつて、かくすんだらう！」と、お母さんは和い^{やはら}いでいつた、「これはどんな影繪？ お見せ。」

ワローヂャは恥づかしくなつた。しかし、いふことを聽いて、お母さんに影を見せ始めた。

「ほら、これは禿げ頭の紳士。それから、これは兎の頭。」

「ああ、お前！」と、お母さんは叫んだ。「これで、どうして豫習が出来るの。」

「え、僕、お母さん、少し。」

「それはさうさ、少しくらゐ！ 何だつてお前、顔をあかくするの？ まあ、いいかげんにお

し。ひどい目に合はしてあげる。」
お母さんはワローヂャの短い髪の毛をくしゃくしゃにしてしまった。彼はわざと笑ひ出し、ほてる顔をお母さんの肘の下にかくした。

お母さんは行つてしまった。するとワローヂャは一その氣つまりと恥辱を感じた。彼は若しも友達のことであつたら大いに笑つてやるところだつたが、自分のやつてゐるところをお母さんに見つかつてしまつたのだ。

ワローヂャは自分は利口で、眞面目な子供だと考へてゐた。しかし、何といつても、かうしたことは、女の子が集まつたときにだけやつて見せるべき遊びなのである。

彼は影繪の本を自分のテーブルの抽斗ひきだしに入れて、それから一週間以上も、とり出さずに置いた。全くこの一週間ほどの間は、殆んど思ひ出しもなかつた。ただ時をり晩になつて、一つの課目から次の課目へと移つてゆくうちに、お嬢さんの角のある頭を思ひ出して微笑むのであつた。時として、抽斗ひきだしから本をとり出さうとすることもあつたが、お母さんに見つけられたことを思ひ出すと、すぐに勉強にとりかかつた。

影と光

五

ワローヂャと彼の母、エヴゲーニヤ・ステパノヴナとは或る縣の田舎に自宅をかまへて、そこに暮らしてゐた。

エヴゲーニヤ・ステパノヴナはすでに九年の間、寡婦として過ごしたのであつた。今は丁度、三十五歳になる。が、今なほ若々しく、器量よしで、ワローヂャは心からお母さんを愛してゐた。彼女は全く息子のために生きて來た。息子のために古典語も學び、つねに息子の學校のことにくよくよと氣を配つてゐた。物靜かで、愛想のよい彼女は、蒼白い顔に大きな眼をやさしげにかがやかしながら、世間といふものを幾分おぼつして眺めてゐた。

二人は一人の召使と暮らしてゐた。その名をプラスコーヴィヤといふ商人の寡婦で、氣むづかしく、かなり氣丈なお婆さんであつた。彼女は四十五歳であつたが、實に口の重い女なので、百にもなる老婆に似てゐた。

ワローヂャは彼女の暗鬱な、まるで石のやうな顔を見ると、屢々こんなことを知りたがつた、——長い冬の夜、厨にあつて、冷たい編針が時をり音を立てて、彼女の骨ばつた手に動いていつて、ばさばさに乾いた唇が、音もなく數をよんでゆくとき、果たして彼女は何を考へてゐるのか

影と光

と。酒飲みの亭主を思ひ出してゐるのか？ 或ひは若くしてこの世を去つた子供たちを？ 或ひはまた、よるべない孤獨の老年がぼんやりと胸にうかぶのか？

彼女の石のやうにこはばつた顔は、やるせないほど陰鬱で、しかも峻厳であつた。

六

長い秋の夜。おもてには雨と風。

何といふ退屈なこと、ランプの光のよそよそしさ！

ワローヂャは頬杖ついて、左の横腹をすつかりテーブルにもたせかけて、部屋の白い壁と、窓の白いカーテンとを眺めてゐた。

壁紙に蒼白い花は見えぬ……物憂い、白い花……

ランプの白い笠はランプの光を幾ぶん遮つてゐる。部屋の上半部は全く薄らあかりの中にある。

ワローヂャは右手を上にしあげた。かげをつくつてゐるランプの笠によつて、長い影が壁に延びる。輪廓がぼんやりして、はつきりしない影が……

悖徳の世、傷ましい世を去つて天に向かつて飛んでゆく天使の影だ。廣い翼と、物悲しげに秀

でた胸に頭を垂れた天使の……

やさしい天使の雙の手によつて、何か意味のあるものや、或ひはやくざなものか、この世から

運び去られるのであらうか？

ワローヂャは重苦しく息をついた。物憂げに手をおろした。彼は倦み疲れた眼を本におとした。

長い秋の夜……物憂い白い花……壁の向ふには、泣く聲や咳く聲……

七

お母さんはもう一度、ワローヂャが影繪に耽つてゐるところを見つけた。

このときは牡牛の頭をうまくあらはすことができ、彼はそれを惚れ惚れと見つめてゐた。さうして、牡牛を吼えさせたり、首を伸ばさせたりしてゐた。

けれど、お母さんは不満であつた。

「またそんなことをしてゐて！」と、彼女は咎めるやうにいつた。

「ほんのちよつとですよ、お母さん。」と、ワローヂャは恥づかしさうにいつた。

「そんなことは、暇な時にやれるつて。」と彼女はいひ續けた、「お前ももう赤ん坊ぢやないん

だし——そんなつまらないことをして、どうして恥づかしくないんだらう！」

「お母さん、もう決していたしません。」

とはいつたが、ワローヂャにはこの約束を守ることがむづかしかつた。彼は影繪の遊びをするのが大好きになつてゐたので、何か面白くない學課をしてゐる最中に、それをやつて見たくてたまらぬことがしよつ中であつた。

光
この遊びをするのに、どうかすると、夜の多くの時間を費やすことがあつた。そのためによく豫習をするのがうまく行かなかつた。あとで取り戻さうとしても、十分にやりとげられなかつた。といつて、どうして、この遊びをやめられようか？

影
ワローヂャはやがて、いくつかの新しい形を工夫することが出来た。それは指ばかりでやるのではなかつた。これらの形は壁のうへに住んでゐる。ワローヂャには時をり面白い話を交はしてゐるやうに思はれた。

尤も、彼は以前にも大の空想家ではあつた。

八

夜。ワローヂャの部屋は暗い。ワローヂャは床に横たはつた。が、眠れない。彼は仰向けになつて、天井を見つめてゐる。

通りを誰かが燈あかりをもつて通る。あ、天井に沿つて、燈あかりに照らし出された赤い點のなかを、その人の影が走つて行く。燈あかりは通る人の手の中にゆれてゐるらしい。影は不規則に、ふるへるやうにゆれてゐる。

光
ワローヂャは何とはなしに氣味わるく、怖ろしくなつて来る。彼は、すばやく蒲團をかぶつて、氣がせくあまり、すつかり慄へて、そそくさと右を下にして寝る。さうして空想に耽り始める。

影
彼はほつとして、やさしい氣持になる。彼の腦裡には、可愛らしい、無邪氣な空想が、いつも夢のまへに訪れる。空想が高くかさなる。

眠らうとして横になるとき、急に怖ろしくなつて、まるで幼な兒のやうに、氣の弱くなることが屢々ある。そのやうなときには、枕に顔をかくし、子供らしい素振りを忘れて、やさしく、愛想よくなつて、お母さんを抱擁して、接吻したいと思ふ。

九

灰いろの夕闇が濃くなつて來た。影は地上に降りて來た。ワローヂャは物悲しかった。しかし、ここにはランプがある。光はテーブルの青羅紗にそそがれ、壁には、そこはかとなく、愛らしい影が忍び込んでゐる。

ワローヂャは喜びと活氣がみなぎるのを感じ、大いそぎに例の灰いろの本をとり出した。

牡牛が吼える……お嬢さんは聲高らかに笑ふ……この禿げ頭の紳士は何といふ意地わるさうな圓い眼附をしてゐるんだらう。

今度は自分の工夫したもの。

草原。胸亂を背負つた旅の女。何だか、悲しい、退屈な旅の歌がきこえるやうな氣がする……

……ワローヂャはうれしかつたが、同時にまた悲しかった。

一〇

「ワローヂャ、この本をもつて見るのを見るのは、これで三度目ですよ。一體、どうなの、毎晩毎晩、自分の指にばかり見とれてゐて？」

ワローヂャはきまりわるさうに、つかまへられたいたづら小僧のやうに、テーブルのわきに侍つて、ほてつた指で例の本をくるくる廻してゐた。

「ここへよこして。」と、お母さんがいつた。

ワローヂャはどぎまぎして、本を差し出した。お母さんはそれを手にとると、何もいはずに出ていつてしまつた——ワローヂャはノートに向かつて腰をおろした。

彼には自分の執拗さから、母親を怒らせたことが恥づかしかつた。そして、お母さんが本を持つていつてしまつたことが、忌々しかつた。が、それよりも恥づかしかつたのは、かかる事態に自分を導いたといふことであつた。彼は大へん間の悪い思ひをし、またお母さんに對する忌々しさに苛まれた。母を怒るといふことが彼には恥づかしかつたが、怒らずにはゐられなかつた。怒ることが恥づかしかつたからこそ、彼は一そう憤怒の念に驅られたのである。

『いいよ、持つて行くなら持つて行け。』と、つひに彼は考へた、『僕は、なくたつて平氣だ。』實際、ワローヂャはもはや、その本にあつた形をすつかり諳記してゐたのだ。ただ、間違ひなしにやるために本を利用したまでであつた。

一一

お母さんは影繪の本を持つていつて、あけてみて——物思ひに沈んだ。

『一體、この中に誘惑的なものがあるかしら？』と彼女は考へた、『あれは利口な、よい子だのに——急にこんなつまらないものに氣をとられて！』

『いや、これは、そんなにつまらないものでもないわけだ。』

『一體、どうしたことだらう？』と、熱心に檢め始めた。

妙な臆病風が彼女のうちに生まれて來た、——この黒い繪に對する何となく怨めしい、びくびくする氣持が。

彼女は立ちあがつて、ランプをともした。

灰いろの本を手にして、壁の方に近づいて、落ちつかない憂愁のうちに佇んでゐた。

『さう。これはどんなものなのか、やはり知つておかなくては。』と、彼女は意を決して、——初めから終りまで影繪をやり始めた。

彼女は當然あらはれなくてはならない形が、はつきりあらはれるまでは、熱心に、注意ぶかく指を組み合はせたり、兩手をまげたりした。彼女のうちには、混亂した、おどおどとした感情がうごいてゐた。彼女はそれを征服しようとなつた。が、臆病風が募つて來て、彼女を囚へる。彼女の手はふるへ、生の微光におどかされた想念は、いたづらに馳せて、威嚇的な悲哀を迎へるに過ぎなかつた。

ふつと、彼女は自分の息子の足音を聞きつけた。彼女はぞつとして、本をかくし、あかりを消した。

ワローヂャははいりかかつたが、敷居のところ立ちどまつた。彼は、お母さんがきまりわるさうな、妙な恰好をして、壁のわきに佇み、厳しい眼附で彼を見てゐるのに狼狽したのだ。

「どうしたの？」とお母さんは荒々しい、がさがさした聲で訊ねた。

ワローヂャの脳裡を、はつきりしない推察が通り過ぎた。が、ワローヂャは、すばやくそれを追ひのけて、お母さんと話をし始めた。

光
と
影

一一一

ワローヂャは外へ出かけて、家にゐない。お母さんは幾たびか部屋のなかを歩きまはつた。彼女は自分のうしろの床ゆかのうへに、自分の影が動いてゐるのに氣がついた。妙なことだ！——こんな影を見て氣つまりになつたのは、生まれて初めてのことだ。影があるといふ考へは、たえず彼女の頭のなかに浸み込んだ、——しかも、彼女はなぜかこの考へを怖れて、影を見まいとさへ努

めてゐた。

それなのに、影は彼女のうしろを這つて、彼女を焦々させた。エヴゲーニヤ・ステパノヴナは努めてほかのことを考へようとしたが——駄目だつた。

「いい加減にしなよ、影よ、影！」と、彼女は妙に苛立つて足を踏みならしながら、聲高く喚いた。「一體、どうしたといふんだらう？ どう？」

と、直ぐにまた大きな聲を出したり、足を踏みならしたりすることの魯かしさを思ひ返して、靜かになつた。

彼女は鏡のそばに寄つて行つた。その顔はいつもより蒼ざめて、唇はおどおどと憎しみにふるへてゐた。

『神経だ……』と、彼女は考へた、『よくよく自分を抑へなければならぬ。』

一三

夕闇が降りてゐた。ワローヂャはさまざまな空想に耽つた。

「さ、散歩に行きませう、ワローヂャ。」と、お母さんがいつた。

しかし、通りにも、到るところに影があつた。夕ぐれの、神祕的な、捕へがたない影が。それらの影は、ワローヂャに何かしら親しい、限りなく悲しいことをささやいた。

霧のかかつた空には、二つ三つの星があらはれた。かういふ星は、ワローヂャや、彼をとり巻くいくつもの影には、あまりに遠く、ゆかりのないものであつた。それでも、ワローヂャはお母さんを愉快にしようとして、これらの星のことを考へ始めた——影に縁のないのは、ただ星があるばかりなのだ。

「お母さん。」と、彼は、お母さんが何か言はうとしたのを妨げたのにも氣づかずいつた。

「あの星まで行けないのは、ほんとに残念ですね。」

お母さんは空を仰いで、かう答へた。「でも、行く必要はないよ。私たちはこの地上にゐるだけで結構だよ。あそこには、別のものがあるのさ。」

「まあ、何て弱い光でせう！ でも、それで却つていいの。」

「なぜ？」

「だつてね、お母さん、若しも、もつと強く光つたら、影が落ちて來ますよ。」

「ああ、ワローヂャや、お前は何だつてさういつもいつも、影のことばかり考へてゐるの？」

「あ、お母さん、つい、」と、後悔の色を聲にあらはしてワローヂャがいつた。

一四

ワローヂャは前よりも一そう精を出して勉強した、——彼は怠けてゐて母親を嘆かせるのを怖れたのである。しかし、々方になつたら新しい、變つた影をうつすやうに、テーブルの上のいろんな物を置き換へようと、空想のあらんかぎりをつくしてゐた。彼は何でも手あたり次第に、あれをあそこに、これをここに置いてみて、白い壁のうへに何か意味のわかる物の形があらはれると大喜びであつた。これらの陰影の或る物の形は、彼に親しい、貴重なものとなつた。それらは啞ではなく、彼に話をしかけた——そして、ワローヂャには彼らの呖く言葉がわかるのであつた。

國道の秋のぬかるみを踏んで、ふるへる手に撞木杖をつき、かがんだ背に木の皮づくりの胴亂を背負つてぶらつく元氣のない旅人が、なぜ泣言をいふのかも悟ることが出来た。

また、雪におほはれた森が、冬の靜寂のうちに愁ひに沈んで、凍てた枝をぱちぱち鳴らしながら、何をこぼしてゐるのかが分かり、更にまた動作ののんびりとした大鴉が榊の老い樹のうへで、なぜに鳴くのか、木の洞のうへに、あくせくする栗鼠が何を悲しんでゐるのかなども察しがついた。

物さびしい秋風に吹かれて、老いぼれて、宿もない婆さん乞食たちが、狭い墓場の、ぐらぐらする十字架や、やるせなく立つ黒い墓の中に、ぼろぼろの着物を着てふるへながら、何を泣いてゐるのかも分かつた。

かくするうちに、今は自分を忘れて、惱ましい哀傷に見舞はれた。

一五

母親はワローヂャが相變らずふざけてゐるのに氣がついた。

彼女は晝食のときに言つた、

「ねえ、ワローヂャ、やるにしても、ほかのことをやつたらいいに。」

「どんなことを？」

「本を讀んでもいいし。」

「ええ、本を讀み始めると、すぐに影をうつしたくなるんです。」

「それなら、ほかの遊びごとを工夫したらいいに、——せめて、しゃぼん玉でも。」

ワローヂャは悲しげに微笑んだ。

「でも、しゃぼん玉が舞ひあがると、その影が壁にうつるんです。」

「ワローヂャ、お前はそんな風だと、しまひには神経をわるくするぢやないの。今だつて、こんなことをしてゐるために、そんなに瘦せちまつて。ちやんと、お母さんには分かるんですよ。」

「お母さん、お母さんは大げさだ。」

「どういたしまして！……だつてお母さんは知つてゐるんですよ、お前が毎晩よく眠れなくなつたり、時をり寢言を言ふやうになつたのを。まあ、考へてごらん、若しもお前が病氣にでもなつたら！」

「まだそんなことをいつて！」

「いつてはなりません。けど、若しもお前が気がちがつたり死んだりしてごらん、お母さんはどんなに悲しい目にあふか！」

ワローヂャは微笑んで、お母さんの頭にしがみついた。

「お母さん、僕は死にませんよ。僕はもう決してやりません。」

母親はワローヂャがもう泣いてゐるのに気がついた。

「もう、いいよ、」と彼女はいつた、「氣にかけることはありませんよ。でも、お前、どんなに

神経質になつたか分かるでせう、——お前は笑つたり泣いたり一しよにしてゐるんだもの。」

一六

お母さんはじつと、怖る怖るワローヂャの顔を凝視した。いろんな小さなことが、今は一々彼女を興奮させた。

彼女はワローヂャの頭がかすかに歪んでゐるのに気がついた。片方の耳はもう一つよりも高く、顎は少しばかり片寄つてゐた。お母さんは鏡を見て、ワローヂャがこんなところまで自分に似てゐるのを認めた。

『ことによつたら、』と、彼女は考へた、『これは悪い遺傳の一つのあらはれで、退化を示すものではないかしら？ さうだとすれば、悪のもとはどこにあるのか？ 私はそんなにつり合はない女だつたのかしら？ それとも父親が？』

エヴゲーニヤ・ステパノヴナは亡夫のことを思ひ出した。良人は至つて氣立てのよい、なまけ深い人で、氣が弱かつた。感情に驅られて、わけもなく熱狂したり、かと思ふと、神秘的な氣分になつて、こよない社會機構を夢みて、民衆の中へ出て行つたりしたが、——晩年はすっかり酒

びたりになつてゐた。

彼が亡くなつたときは、まだ若く、わづかに三十五歳であつた。

母親はワローヂャを醫者のところへ連れて行つて、その病状を述べたりした。醫者は樂天的な青年であつたが、微笑のうちに彼女の話を聴き終ると、面白い洒落を交へながら食餌療法や生活様式に關する忠告を與へ、さも楽しさうに、そそくさと「處方箋」を書いて、ワローヂャの肩をぽんと叩いて、冗談にかう附け加へた、

「だが何よりいい薬は——斬つてやることだらうな。」

お母さんはワローヂャに對してひどい侮辱をうけたやうに思つたが、ほかの指圖は悉く嚴重に守つた。

一七

ワローヂャは教室に坐つてゐた。彼は退屈してゐた。聴いてゐたが、身にはいらなかつた。

彼は眼をあげた。すると、教室の前の壁に近い天井に、一つの影が動いてゐた。ワローヂャはそれが一番目の窓からはいつて來るのに氣がついた。最初は、窓から教室のまん中へ映つてゐたが、やがて、すばやくワローヂャの前の方へはいり込んだ、——たしかに窓の下の通りを誰かが歩いてゐたのだ。この影がまだ動いてゐるとき、二番目の窓から、別の影がはいつて來て、やはり初めのうちはうしろの壁に映つたが、直ぐにいきほひよく前の壁の方へまはり始めた。同じことが、三番目、四番目の窓でも繰り返された。影は教室の天井に映つて、道行く人が前の方へ動くにつれて、うしろへさがつて行つた。

「さうだ。」と、ワローヂャは考へた、「これは明け放しの場所を、影が人について行くのとは別だ。ここでは人が前へ行けば、影はうしろへ滑つて行く。別の影がまた、前の方で人と一しよになる。」

ワローヂャは先生の憔悴した姿に眼を移した。先生の味氣ない、黄色い顔がワローヂャを焦々させた。ワローヂャは先生の影をさがして、やつと先生の、椅子のうしろの壁のうへに見つけた。影は不恰好にまがつて、揺れてゐるが、——そこには黄色い顔も毒を含んだ微笑もつかんでゐなかつた。そこでワローヂャにはそれを見るのが愉快だつた。彼の考へは、どこか遠くへ走つてゐるので、——もはや何ひとつ耳に聞こえなかつた。

「ロヴレフ！」と、先生が彼を呼んだ。

ワローヂャはいつものやうに立ちあがつて、ぼんやりと先生を見ながら立つてゐた。あまり間

の抜けた様子をしてゐるので、級友たちは笑つた。先生はますます険悪な顔附をした。

やがて、ワローヂャは先生が猫なで聲で、意地わるく彼を揶揄するのを耳にした。ワローヂャは侮辱を感じながら、弱味をもつてゐるので、ふるへてゐた。それから、先生はワローヂャが何も知らず、不注意だから、一點(譯者註：譯者註：わが國の零點と同じ)をやると言ひ渡して、それから坐れと言つた。ワローヂャは馬鹿々々しさうに微笑んで、自分に偶然おこつたことを考へ出した。

一八

一點はワローヂャには生まれて初めてのことであつた！

それはワローヂャにとつて、どんなに不思議なことであつたらう！

「ロヴレフ！」と、級友たちは笑つて彼を押しながら嘲つた、「君は落第點をとつたんだな！おめでたう！」

ワローヂャはきまりの悪い思ひをした。彼はかういふ場合にどうしたらよいのか、そんなことは今なほ知らなかつた。

「うん、とつたとも。」と、彼は恨めしげにいつた、「お前の知つたことか！」

「ロヴレフ！」と怠け者のスネーギレフが叫んだ、「わが黨がふえたぞ！」

考へれば、これは初めての一點だ！ しかも、お母さんに、見せなければならぬのだ。

彼は氣恥づかしく、肩身のせまい思ひをした。ワローヂャは肩に背負つたランドセルの中に變に重たい、不細工なものがあるやうな感じがした。——この「落第點」が彼の意識に極めて工合わるくへばりついて、心のなかの何ものともしつくりしないやうな氣がした。

「一點！」

彼は一點といふものをつねに考へるやうにはなれなかつた。さうかといつて他のことも考へられなかつた。学校の近くにある巡査がいつものやうに厳格な目附で彼を見たとき、ワローヂャはどうしたわけか、こんなことを考へた、

『さあ、僕が一點をとつたことを君が知つたらどうだらう！』

このことは全く工合がわるく、馴れないことであつた、——ワローヂャはどうして頭を支へてゐるか、手をどこにおいたらよいか、分からなかつた。全身に工合のわるさが沁みてゐたのだ。

更に、級友の前では平氣な風をして、ほかのことを話してゐなければならなかつた。

級友たち！ ワローヂャは、彼らがみんな自分の一點をひどく喜んでゐるのだと思ひ込んだ。

お母さんは「一點」を見ると、いかにも合點がゆかないやうな眼をワローヂャに向けて、もう一度、點數をちらと見てから、靜かに聲をかけた、

「ワローヂャ！」

ワローヂャは母親の前に立つて、消え入らんばかりであつた。彼はお母さんの着物の襷を眺めたり、蒼白い手を眺めたりしてゐたが、彼女の脅えたまなざしを自らのふるふる臉に感じてゐた。「何です、これは？」とお母さんが訊ねた。

「いいえ、何でもありません。」と、ワローヂャは不意に口を出した、「だつて、初めてぢやありませんか！」

「初めて！」

「まあ、こんなことは誰にだつてあるんですよ。それに、てんで思ひがけなかつたんです。」

「ああ、ワローヂャ、ワローヂャ！」

ワローヂャは泣き出して、赤ん坊のやうに、頬に掌をあてて涙をふいた。

「お母さん、叱らないで。」と、彼はささやいた。

「これもみんなお前の影繪のせいです！」とお母さんはいつた。

ワローヂャはお母さんの聲に涙を含んでゐるのを感じた。彼は胸のつぶれる思ひをした。彼はお母さんをちらと見た。お母さんは泣いてゐた。彼はお母さんにしがみついた。

「お母さん、お母さん、」と、彼は母親の手に接吻しながら、繰り返した、「ほんとにやめます、影繪をすつかりやめます。」

ワローヂャはきつと心を引きしめて、影繪に心を惹かれながらも、やらずにゐた。彼は素通した學課の埋め合はせをしようと努めた。

しかるに、影は執拗に彼の胸にうかんだ。彼が指を折つて影を招かなくても、壁のうへに影のあらはれるやうに、物をならべることをよしても、——影そのものが、うるさく、しつこい影そのものが彼を取り巻いてゐた。

影をうつすいゝるんな物は、もはやワローヂャの興味を惹かなかつた。彼は殆んどそれらの物を見なかつた。彼のあらゆる注意力は、それらの影に集中された。

彼が家をさして歩いてゐるときは、よく太陽が、けむり色の飾りにおほはれたやうな秋の雲の中からちらりと顔を出したりして、——到るところに影の走るのを喜んだものであつた。

影はあたりの到るところにあつた。焰から来るはつきりした影や、分散する眞晝の光から来るほのかな影など、——すべてがワローヂヤの方へむらがり寄つて来て、互ひに交叉したり、裂くことの出来ない網のやうに彼を掩つたりした。

それらの影のうちには、どうしてもわからない、謎めいたものや、彼に何ごとかを思ひ起こさせたり、何かを暗示するものがあつたが、——いとしい、親しい、なつかしい影もあつた、——さういふ影をワローヂヤはそれとも氣づかずに、ほかの影のいりみだれて明滅する到るところにさがし求めてつかまへた。

が、それらのいとしい、なつかしい影は悲しげであつた。

ワローヂヤは自らさういふ影を求めてゐることに氣づくつと、良心の苛責を覺えて、母親のところへ行つて告白するのであつた。

或るとき、ワローヂヤが誘惑に勝てないことがあつた。彼は壁にびつたりと身を寄せて、牝牛の影をうつし始めた。と、母親がそれを見つけた。

「また！」と、母親は怒つて叫んだ、「いやもう、仕方がないから、校長先生にお願ひして、

監禁所へ入れて貰ひますよ。」

ワローヂヤは忌々しげに顔をあからめて、無愛想に答へた、「あそこにだつて壁はありますよ。どこにだつて壁はあります。」

「ワローヂヤ！」と、母親は悲しさうに叫んだ、「何をいふんです、お前は！」

しかし、ワローヂヤは早くも自分の無作法を後悔して、泣いてゐた。

「お母さん、僕は、どうしたんだか分かりません！」

二一

お母さんはいはれもなく影を恐れる氣持に、やはり打ち克つことが出来なかつた。彼女は自分もまた、ワローヂヤのやうに影のことばかりに氣をとられてゐることを、まことに屢々考へるやうになつたが、いつも彼女は自分で自分を慰めようと努めてゐた。

「何ていふ馬鹿々々しい考へだらう！」と彼女は獨り言をいつた、「多分、うまく納まつてくれるだらう。こんないたづらをやつてゐても、そのうちやめるだらうよ。」

とはいつても、言ひ知れぬ恐怖に胸はふるへ、人生に對して臆病な彼女の考へは、近づき来る

悲しみを迎へようとして根氣よく走つて行くのだ。

朝の物悲しいとき、彼女は本心にかへつて、自分の生涯を思ひ起こし、——その空虚さ、無用さ、価値なさをしみじみと感じた。それは濃くなつてゆく夕闇のうちに融け合つた影の、意味もないただ一つの閃きにもひとしかつた。

『何のために私は生きて来たのか?』と、彼女は自問した、『息子のためであつたか? それにしても、何のために?』あの子が影の餌食になつたり、迷妄や、生命のない壁にあらはれるはない反射につながれて——視野の狭い狂人になるとは?

やがてあの子もまた生活にはいり込むであらうが、その生活も、まるで夢のやうにはかない、役にも立たないことの連続になるだらう。』

彼女は窓のわきの肱掛椅子に腰をおろして、深く物思ひに沈んだ。

彼女の考へは物悲しく、重苦しいものであつた。

憂愁のうちに、彼女は美しい、白い手を曲げた。

やがて彼女の考へは散り散りになつた。彼女は曲げた手を眺めて、どんな形がいま、壁の上にあらはれるものかと想像し始めた。が、ここで自分を抑へて、ぎよつとして飛びあがつた。

「まあ!」と、彼女は叫んだ、「こんなことは、狂氣の沙汰ではないのか!」

二二

母親は晝食のとき、つくづくとワローヂャを見た。

『この子は、このいけない本を手にしてこのかた、こんなに蒼ざめて、瘦せてしまつた。すっかり變つてしまつた、——性質も、何もかも。』

『人の話では、人の性質は死ぬ前に變るといふ。若しもこの子が亡くなつたら、どうしよう?』

ああ、いやいや、そんなことのないやうに?』

匙は母親の手の中でふるへた。母親はおどした眼で聖像を見あげた。

「ワローヂャ、なんでお前はスープを飲んでしまはないの?」と、脅えたやうな調子で訊ねた。

「お母さん、欲しくないんです。」

「ワローヂャ、わがままをするもんぢやありませんよ。スープをいただかないと、からだを悪くしますよ。」

ワローヂャは大儀さうに微笑んで、ゆつくりとスープを食べ終へた。母親はあまりにもたくさんスープを皿に盛つておいたのである。彼は椅子に肩をもたせて、腹立ちまぎれにスープのうま

くなかつたことを言はうとした。が、母親がひどく不安さうな顔をしてゐたので、ワローヂャはつい言ひそびれて、生氣のない微笑みをうかべた。

「もう今はおなか一ぱいですよ。」と、彼はいつた。

「ああ、ワローヂャ、いけません、今日はみんな、お前の好きな物ばかりなのに。」

ワローヂャは悲しさうに溜息をついた。彼はお母さんが、「お前の好きな物」の話をするとき、いつもおなか一ぱい食べさせようとする意味だらゐは、とうに承知してゐた。お茶のあとにさへ、お母さんが昨日と同じやうに、いやでも肉を食べさせようとしてゐることまで、彼は推量するのであつた。

二三

晩、お母さんはワローヂャにいつた、

「ねえ、ワローヂャ、またお前は氣をひかれてゐる。それ位ならいつそのこと、ドアを明け放しにしたらいい！」

ワローヂャは勉強にとりかかつた。が、うしろにドアがあいてゐて、時をりお母さんがそのわきを通り過ぎるのが腹立たしかつた。

「これぢやもう出来ない。」と、彼は椅子をがたがた動かしながら叫んだ、「ドアがあいてたんでは、何だつてやれないや。」

「ワローヂャ、一體、何だつてどなつてるの？」とお母さんは言葉やさしく咎めた。

ワローヂャはもう、自分が悪いことを後悔してゐたので、泣き出してしまつた。

「ね、お前、お母さんはお前の妙な癖を直してあげようと思つて心配してゐるんぢやありませんか。」

「お母さん、ここにちよつとゐて下さい。」と、ワローヂャは頼んだ。

母親は一冊の本をとつて、ワローヂャのテーブルのわきに腰をおろした。

暫くの間、ワローヂャは落ちついて勉強してゐた。ところが、お母さんがゐるといふことが彼を焦々させ始めた。

『まるで病人が看護されてゐるみたいだ。』と、彼は恨めしげに考へた。

彼の考へは亂れて、忌々しげに、からだを動かしたり、唇を噛んだりしてゐた。つひにお母さんはそれに氣ついて、部屋を出て行つた。

それでも、ワローヂャは氣が安まらなかつた。彼はじれつたい様子を見せたことを悔いる心に

苛まれた。彼は勉強をつづけようとしてみたが——出来なかつた。たうとう、彼は母親のところへ行つた。

「お母さん、なんでこつちへ来てしまつたの？」と、彼はおつおつと訊ねた。

二四

お祭の前夜であつた。聖像の前には燈明がともつてゐた。

夜も更けて、ひっそりしてゐた。お母さんは起きてゐた。寢室の神祕的な薄闇に彼女はひざまづいて、お祈りをしたり、子供のやうに鼻嚙りをしながら泣いたりしてゐた。彼女の辮髪は白い着物のうへに垂れ、彼女の肩はふるへてゐた。お祈りをする姿勢で両手を胸のところにあげたかと思ふと、彼女は涙にうるむ目で聖像を見た。鎖でさがつてゐる燈明は、彼女の熱い息のためにきはめてかすかにゆらめいた。影はゆれたり、隅々にむらがつたり、聖龕のかげに動いたりして、何ごとか神祕的なことを呟いてゐた。その呟きのうちには、はかない憂愁が漂ひ、ゆるやかな揺らぎのうちには、言ひ知れぬ悲しみがこもつてゐた。

母親は蒼ざめ、妙な、大きな眼をして立ちあがつたが、力のぬけた足でよろよろした。

彼女はしづかにワローヂャのところへ行つた。影は彼女をとり巻いて、うしろで、微かにさらさらと鳴つたり、足もとを這ひ廻つたり、蜘蛛の網のやうに軽いものは彼女の肩に落ちて来て、彼女の大きな眼を覗きながら、何やらわけのわからぬことを呟いたりした。

彼女は忍び足して息子の寢臺に近づいた。燈明の光に彼の顔は蒼白く見える。彼のうへには、妙な、とがつた影が落ちてゐた。いきの音が聞こえぬ——彼は母親が怖れるほど靜かに眠つてゐたのだ。

お母さんはぼんやりした影に圍まれ、何とも知れぬ恐怖に包まれて、そこに佇んでゐた。

二五

教會の高い穹窿は暗く、神祕的であつた。夕べの祈りの歌は穹窿の方へ舞ひあがつて、その響きはおごそかな悲しみにあふれてゐた。暗い聖像は蠟燭の黄いろい光に照らされて、神祕的に、いかめしく見えてゐた。蠟と香との暖かないきは、氣高い悲しみを空氣中に充滿させた。

エヴゲーニヤ・ステパノヴナは聖母の像の前に蠟燭を立てた。それから彼女はひざまづいた。が、彼女の祈りはとりとめもなかつた。彼女は蠟燭を見た。その焰はゆらいでゐた。蠟燭から來

る影はエヴゲーニヤ・ステパノヴナの黒い着物のうへや床のうへに落ちて、ほのかに揺れた。影は教會の壁から壁を奔つて、おごそかな、悲しい歌の鳴りひびく暗い穹窿の、高いところに消えていった。

二六

つぎの夜。

ワローヂャは眼をさました。闇は彼を包んで、音もなく動いてゐた。

ワローヂャは両手を出して、上にあげ、しきりに動かして、そのさまに目をこらした。闇のなかで、手は見えなかつたが、自分の眼の前に暗い手が動いてゐるやうに思はれた……。

暗い、神祕的な手は、悲しみと孤獨の憂愁の呟きを擔つてゐる……

母親もまた眠らずにゐる、……憂愁に悩まされてゐるのだ。

母親は蠟燭をともして、息子の部屋にこつそりとやつて来る。どんなに眠つてゐるかを見ようとして。

彼女は音もなくドアをあけて、おづおづとワローヂャの寢臺を眺める。

ワローヂャの赤い掛蒲團を横ぎつて射す一すぢの光が壁のうへにふるへてゐる。ワローヂャは光の方に両手をさし伸べて、胸をときめかしながら、影を追つた。彼は、どこから光が射して來るのか、不思議とも思はなかつた。

彼は身も心も全く影に奪はれてゐた。壁に据ゑられた目は、烈しい狂氣に充ちてゐた。

光のすぢが擴がつて、影がせはしく動いた。肩に背負つた古道具を、どこかへ早く運ばうとしてゐる宿なしの旅の女のやうに、腰をかがめて、無愛想な影が。

母親は怖ろしさにふるへながら、寢臺に近づいて、しづかに息子を起こした。

「ワローヂャ！」

ワローヂャは正氣に返つた。ほんの一寸のあひだ、彼は大きな目で母親を眺めた。やがて、からだ中をふるふるとふるはせながら、寢床から飛び出して、母親の足もとに倒れるなり彼女の膝を抱いて、泣き出した。

「お前は何ていふ夢を見るんだらうね、ワローヂャ！」と、悲しさうに母親は叫んだ。

二七

「ワローヂャ、」と、朝のお茶のときに母親がいつた、「あれをよすことですよ、若しも毎晩毎晩、影繪ばかりしてゐると、それこそ取り返しのつかぬことになりますよ。」

蒼ざめた少年は悲しさに頷いた。唇はびくびくと動いた。

「どう、二人でかうしようかしら？」母親はつづけた、「毎晩、二人でちよつと影繪をするの、それから勉強するの。いいことね？」

ワローヂャはいくらか元氣づいた。

「お母さま、お母さまあ！」と彼は恥づかしさうに言つた。

二八

街でワローヂャは睡氣を覚え、おびえてゐた。あたりに霧が立ちこめて、寒く、憂鬱だつた。家々の輪廓は霧のなかで異様に見うけられた。人々の陰気な姿は烟霧のもとで、不吉な、よそよそしい影のやうに動いてゐた。あらゆるものが極めて異常なものに思はれた。十字路にまどろんでゐる辻馬車の馬は、霧のなかから、見たこともない大きな獣のやうに見えた。

巡査は敵視するやうにワローヂャを睨んだ。大鴉は低い屋根のうへで、ワローヂャの目に悲しみを傳へた。が、悲しみは既に彼の胸にひそんでゐた。——何もかもが彼を敵視してゐるのを見るのが、彼には悲しかつた。

毛の抜けた犬が門の下の隙間から吠え出した、——ワローヂャは妙な屈辱を感じた。

また、街のいたづら小僧が、彼を辱かしめたり、嗤つたりしようとしてゐるやうにも見えた。以前ならば當然の仕返しをしたであらうが、今は恐怖の念が胸にひしひしと迫つて、思はず力のぬけた両手がさがるのであつた。

ワローヂャが家に歸つて来たとき、女中のプラスコーヴィヤがドアをあけて、氣むづかしく、敵意をもつかのやうに彼を見た。ワローヂャは氣づまりだつた。彼はプラスコーヴィヤの陰気な顔を見まいとして、あわてて部屋の中へはいつて行つた。

二九

お母さんは自分の部屋に、たつた一人で腰をおろしてゐた。黄昏のことで、——退屈だつた。どこかに明りがちらついた。

元氣づいて、陽氣になつたワローヂャが、大きな、いくぶん粗暴な眼をして駈けこんで来た。

「お母さん、ランプがつかまりましたから、ちよつと遊びませうよ。」
母親はにつこりして、ワローヂャのあとをついて行つた。

「お母さん、新しい形を工夫しましたよ。」と、ワローヂャはランプを然るべきところに据ゑながら、興奮して言つた、「ごらんなさい、……ほら、見えるでせう？　これは——雪におほはれた草野スチエビですよ、——雪はまだ降つてゐる。吹雪です。」

ワローヂャは両手をあげて、組み重ねた。

「ほら、ごらんなさい。今度は旅のおぢいさんです。膝の邊まで、雪にかくれてゐますよ。なかなか歩けないんです。おぢいさんはたつた一人です。きれいな野原です。村は遠い。おぢいさんはすつかり疲れてゐます。おぢいさんには寒くて、怖ろしいんです。おぢいさんはすつかり腰がまがつてゐます——それほど年が寄つてゐるんです。」

お母さんはワローヂャの指の形を直してやつた。

「ああ！」と、ワローヂャは狂喜して叫んだ、「風がおぢいさんの帽子を引き裂いてゐる。髪の毛を吹きみだして、雪の中へおぢいさんを吹き倒す。雪の吹きだまりはだんだん高くなる。お母さん、お母さん、聞こえるの？」

「大吹雪ね。」

「で、その人が？」

「おぢいさんのこと？」

「聞こえますか、うなつてゐるでせう？」

「助けて！」

二人は蒼くなつて、壁を眺めてゐた。ワローヂャの手はふるへて、——おぢいさんは倒れた。母親が先づわれに返つた。

「さあ、勉強の時間ですよ。」と、彼女はいつた。

朝であつた。お母さんはたつた一人で家にゐた。とりとめもない、憂鬱な考へに耽りながら、彼女は部屋から部屋へと歩いてゐた。

白いドアのうへには、霧にぼんやりうかんだ太陽の散りひろがる光をうけて、彼女の影が映つてゐた。彼女はドアのわきに立ちどまつて、片方の手を大きく、妙な動かし方をして、さし上げた。影はドアのうへに揺れて、何か耳慣れた、悲しいことを呟き始めた。妙な喜びがエツゲーニ

ヤ・ステパノヴナの魂にあふれて、彼女はドアの前に佇み、奇妙な微笑みをうかべて、ちらちらする影を見まもつた。

やがて、プラスチックヴィヤの足音を耳にして、エヴゲーニヤ・ステパノヴナは自分が馬鹿げたことをしてゐたのを思ひ出した。

再び彼女は恐怖におそはれ、憂鬱になつた。

『どこか場所を變へなければならぬ。』と、彼女は考へた、『どこか新しい氣分になれるやうな遠いところへ行つてしまはなければならぬ。』

ここを逃げよう、逃げよう。』

すると、ゆくりなくも「あそこにだつて壁はありますよ。どこにだつて壁はありますよ」と、いつたワローヂヤの言葉が思ひかへされた。

『もうどこへも逃げて行く先がないのだ！』

絶望のあまり、彼女は蒼ざめた美しい手を揉み絞つた。

三二

晩。

ワローヂヤの部屋の床にランプがともつてゐた。ランプのうしろの壁に近い床にはワローヂヤと母親が腰をおろしてゐた。二人は壁を眺め、両手を妙な形に動かしてゐた。

壁には影が奔つて、ゆらゆらと揺れてゐた。

ワローヂヤと母親はその意味を理解した。二人は悲しさうに微笑みを洩らして、互ひに何かしら惱ましい、ありさうもないことを語つてゐた。二人の顔はおだやかで、二人の幻想は朗らかであつた。その喜びはやる方なく悲しく、二人の悲しみは怪しくも喜びにあふれてゐた。

二人の眼は狂氣の色に、幸福な狂氣の色に輝いてゐた。

二人のうへには暗い夜が降りて來た。

小

羊

ハチミリツァ村に豫言者ユリヤのお祭があつた。近郷近在から、お客が或ひは馬車で、或ひは徒歩かちでやつて来て、一日、二日、三日と、あちこちの家々を移り歩いては、飲んだり、食つたり、酒盛を開いたりした。

しまりやの百姓ヴラスはうまく間に會ふやうに用意をしてゐた、——ビールかを醸したり、ウォトカを買ひ入れたり、羊を屠つたりした。

彼が庖丁を手にして羊を屠りに出かけると、子供のアニスカとセニカは、あとをついて行つて、直ぐそばに立つて眺めてゐた。アニスカはまる五つで、セニカは數へ年四つであつた。彼らにはあらゆる物が物珍しく、あらゆることが彼らを喜ばせた。

羊は眞つ白であつた、——また、子供たちの髪の毛も白かつた。子供たちは互ひに手をつないで佇みながら、澄んだ眸をみはつてゐた。羊は鳴き出して、眞赤な血が一面に迸つた、——たまらない。何て愉しいことだらう！

子供たちは廻らぬ舌で喋つたり、小突き合つたりして、父の邪魔になつた。すると、父はどな

りつけた、——二人の子供は笑ひながら向ふへ駈けて行つた。

二

小

父は畑へ出かけて行つた。母は家事に忙がしかつた。子供たちは庭で遊んでゐた。

アニスカがセニカにいつた、

「セニカ、ねえ、セニカ、さ、小羊ごっこをして遊ぼうよ。」

セニカは笑つた。そしていふのである、——尤もまだひとりで、はつきりと物を言ふことが出来ない。

羊

「うん、遊ぼう、僕を小羊にしてね。」

「ああ、いいよ」と、アニスカがいふ、「おまへは小羊におなり、あたいは庖丁でおまへの咽喉を、ぱざりと切るの。」

「血が出るの?」と、セニカが訊ねる、「赤いのが、どつさり!」

「出るわよ。」と、アニスカがいつた。

そして二人は笑ひ出して、大喜びである……

「そんなら、庖丁はどこから持つてくんの?」と、セニカが訊ねた。

「どつにかして持つて来ようよ。」と、アニスカが答へた、「お母ちゃんのところから取つて来ようよ。」

小

子供たちはこつそりと家の中へ忍び込んだ、——それとも知らぬ母親はしきりに餘念なく、薪をペチカの中に積み入れたり、お客さまに出すいろんな温かい食べものや饅頭を料理しようと考えたりしてゐた。子供たちはパンを切るときに使ふやうな、大きな、大きな庖丁を持ち出した、

——お母さんは見えてゐない。彼女は子供どころではないのである。

子供たちは庭へ駈け出して、隅の方にかくれた。

「さあ、早く切つて、」と、セニカが廻らぬ舌でいふ。

さうして、小羊のやうに哀れつばい聲を立てて、——自分で笑ひ出して、姉さんをも笑はしてしまつた。アニスカはセニカの肩をつかまへて、地面に仰向けに押し倒した、——セニカはその間ぢゆう小羊の鳴く眞似をしてゐた。

羊

アニスカはセニカの咽喉のあたりを庖丁でなぐりつけた。セニカはふるへて、しはがれ聲を出した。眞赤な血が一ぱいに、彼の白いルバシカや、アニスカの手に迸つた。血は生あたたかく、ねばねばしてゐた。セニカは静かになつた。

「小羊さん、小羊さん！」と、アニスカは叫んで、笑ひ出した。が、なんとなく、寒氣がして来た。

「さあ、起きなよ、え、セニカ」と、彼女は叫んだ、「もついいよ。」

セニカは起きたがらなかつた。血はもう流れなかつた。アニスカの手はくつついてしまつた。

セニカはからだをちぢめて、ずつと口もきかずに臥せつてゐた、——アニスカは怖ろしくなつた。彼女はセニカのところから駆け出した。

小

家の中へ忍び込んで、彼女は母にかくれて、ペチカの中へはいり込んだ、——胸の中に心臓が重苦しい。アニスカはペチカの薪のうへにのぼつて、坐つてゐる。黙つてゐる。からだ中がぶるぶるふるへてゐる。恐怖と憂愁が彼女に襲ひかかつた。それでも、アニスカはどういふことが起きたのか分からずにゐる。

羊

母はペチカを焚き始めた、——アニスカには全く物の音が聞こえない。聲も立てずに坐つてゐる。小さな心臓は重苦しく、早鐘のやうに動悸をうつ。アニスカの愁はしげな眸には何ものも見えぬ。

薪は燃えつきが悪く、くすぶつて、煙を出した。そして、ペチカ中に煙を充満させて、アニスカを窒息させてしまつた。

三

小

セニカの魂とアニスカの魂とは天國の門へと昇つていつた。天使たちがどぎまぎして、星のやうにかがやく涙を流したが、どうしてよいのか分からなかつた。アニスカの天使が主の前に出て、非常な心痛をもつて祈つた。

「主よ、血ぬられし手をもてる幼な兒は、悪魔にわたさるるや？」

天使を試して、主はたづねた、

「かの罪なき血は何びとの仕業なるぞ？」

羊

天使は答へた、

「われなり、主よ！」

すると神はいつた、

「血を流す者はわが血もて贖ひ、血を流すことを教ふる者はわれ之を贖ふ。痛ましき悲しみをもて、わが贖罪のために、われは人々を祝福するなり。」

そのとき天使たちは、アニスカとセニカを、光まばゆい宮殿や、かぐはしい庭に通した。そこ

には静かな葉のうへに蜜のやうな露がちらつき、その明るい岸には快よい水が流れてゐる。

あとがき

キガトア
 フョードル・ソログープ (Fedor Sologub, 本名 Fedor Kuz'nitch Teternikov) は、一八六三年、ペテルブルグの職人の家に生まれた。母が女中奉公をしてゐた或るインテリゲンチヤの家に人となり、長じて師範學校に學び、卒業後は地方の中學に、やがてペテルブルグの中學に職を奉じ、文壇に出るまで勤めてゐた。彼の生ひ立ちについては、わづかにこれくらゐのことしか知られてゐない。傳記を徴せられる度に、「ほかのことなら兎も角、傳記は unnecessary です。傳記なんぞといふものは、作品が十分に知られ、批評が十分に行はれてからでもよいものです。」との意味を繰り返してゐたからである。

ソログープは露西亞前期象徴派の代表的詩人として幾多の業績を残してゐるが、作家としても最も異色ある作家の一人であつた。

115
 處女作「影」を發表したのは一八九四年であつたが、この作品は舊制度に對する反抗意識を含むものとして、毀譽褒貶の渦に巻きこまれた。しかし、これによつて彼は文壇にデビューしたのであつた。「影」につづく長篇小説「重苦しい夢」は、初め雜誌に掲載され、のちに單行本とし

て刊行されたが、殆んど問題にはならなかつた。一九〇五年に發表された第二の長篇小説「小悪魔」も、最初に發表されたときは、殆んど反響をよび起こさなかつた。一九〇五年の物情騒然たるうちにあつて、評判を得るといふやうなことは無理な沙汰ではあつた。然るに、二年を経て一九〇七年に單行本として刊行されるに及んで、この作品は他に比類のないほどの高い評價を獲て、後にピリニヤークのごときは「ソログープの『小悪魔』こそは、すでに今日では堂々たる露西亞文學の古典である。一切の批評を超えてゐる。」とまで稱揚した。この作品に前後するかずかずの作品は一作いづるごとに高い評價をかち獲て、つひに作家としてのソログープの地位を確固たらしめた。

ここに收めた「かくれんぼ」(Pjatkj)、「白く母」(Belaja Mama)、「光と影」(Svet i Teni)「小羊」(Baranchik)の四篇は、圓熟期における作品であつて、いづれも特異とする少年物語である。

彼の作品の基調がペシミズムであるといふことは屢々いはれたことである。死を讚美することによつて、生の苦痛をのがれようとするのが、その特質であるかのやうにもいはれて來た。しかしながら、彼は生を厭ふのあまり死の讚美をしたのではなく、生を愛することあまりにも深きがゆゑに、醜い現實を厭ふのであつて、そのことは現實の醜惡に汚されぬ子供を描くときに最もよくあらはれるのである。「生きてゐるのは、本當に生きてゐるのは——子供らだけだ。子供ら、子供らだけが生きてゐるんだ！ 成熟——それはすでに死への第一歩だ。」と、彼の作品の一人の主人公は言つてゐる。これはまぎれもなく作者自身の思想であつた。

汚濁に染まない子供たち、醜い現實によつて亡せてゆく子供たち、空想に生きる子供たちは、ソログープにとつてはこよなく貴い。よその女に思ひをかける父のもとに生まれた「かくれんぼ」の少女、イプセンのオスワリドをさへ想起させるレレチカ、白い母に亡くなられて黒い母に育てられてゐたレーシャ、影繪に夢中になつてゐるワローヂャ、親の知らぬ間に血の犠牲となる幼児など、そこには夢と現實の交錯があり、美と醜、生と死の對立がある。しかも、そこには神祕的とまでいへる生への愛がある。ここに收めた四篇は、彼の作品のうち最も特色あるもので、彼の作品の傾向はここに十分に窺はれると思ふ。

昭和十二年仲秋

中山省三郎

岩波文庫

1519

昭和十二年十一月三十日印刷
昭和十二年十二月五日發行

かくれんぼ・白い母 *

定價二十錢

(永井製本)

譯者

中山省三郎
なかやま しょうざぶ ちゅうざぶ

發行者

岩波茂雄
東京市神田區一ツ橋二丁目三番地

印刷者

白井赫太郎
東京市神田區錦町三丁目十一番地

精興社印刷

發行所

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地

岩波書店

電話一〇一八七
九段一〇二番
振替口座東京二六二〇番
小賣部専用

讀書子に寄す

岩波文庫發刊に際して

岩波茂雄

眞理は萬人によつて求められることを自ら欲し、藝術は萬人によつて愛されることを自ら望む。嘗ては民を愚昧ならしめるために學藝が最も狭き堂宇に閉鎖されたことがあつた。今や知識と美とを特權階級の獨占より奪ひ返すことはつねに進取的なる民衆の切實なる要求である。岩波文庫は此要求に應じそれに勵まされて生まれた。それは生命ある不朽の書を少數者の書齋と研究室とより解放して街頭に隈なく立たしめ民衆に任せしめるであらう。近時大量生産豫約出版の流行を見る。その廣告宣傳の狂態は姑く措くも後代に貽すと誇稱する全集が其編輯に萬全の用意をなしたるか。千古の典籍の翻譯企圖に敬虔の態度を缺かざりしか。更に分賣を許さず讀者を繋縛して數十冊を強ふるが如き、果して其揚言する學藝解放の所以なりや。吾人は天下の名士の聲に和して之を推擧するに躊躇するものである。この秋にあつて岩波書店は自己の責務の愈重大なるを思ひ、從來の方針の徹底を期するため既に十數年以前より志して來た計畫を慎重審議との際斷然實行することにした。吾人は範をかのレクラム文庫にとり、古今東西に互つて文藝哲學社會科學自然科學等種類の如何を問はず、苟も萬人の必讀すべき眞に古典的價値ある書を極めて簡易なる形式に於て逐次刊行し、あらゆる人間に須要なる生活向上の資料、生活批判の原理を提供せんと欲する。この文庫は豫約出版の方法を排したるが故に、讀者は自己の欲する時に自己の欲する書を各個に自由に選擇することが出来る。携帶に便にして價格の低きを最主とするが故に、外觀を顧みざるも内容に至つては嚴選最も力を盡し從來の岩波出版物の特色を益發揮せしめようとする。この計畫たるや世間の一時の投機的なるものと異り、永遠の事業として吾人は微力を傾倒しあらゆる犠牲を忍んで今後永久に繼續發展せしめ、もつて文庫の使命を遺憾なく果さしめることを期する。藝術を愛し知識を求むる士の自ら進んで此舉に参加し、希望と忠言とを寄せられることは吾人の熱望するところである。その性質上經濟的には最も困難多き此事業に敢て當らんとする吾人の志を諒として其達成のため世の讀書子とのうらはしき共同を期待す。

昭和二年七月

既刊書目

古事記 寺田成友校訂 *	古今和歌集 尾上八郎校訂 **	三條西榮花物語 卷下 三條西公正校訂 **
訓讀日本書紀 上卷 黒板勝美編 *	竹取物語 並附録 鳥津久基校訂 *	大鏡 和田英松校訂 **
訓讀日本書紀 中卷 黒板勝美編 **	考伊勢物語 尾代弘賢校訂 *	梁塵秘抄 佐佐木信綱校訂 *
訓讀日本書紀 下卷 黒板勝美編 **	土佐日記 池田龜鑑校訂 *	新山家集 佐佐木信綱校訂 **
訓讀日本書紀 下卷 黒板勝美編 **	倭漢朗詠集 山田孝雄校訂 *	水鏡 和田英松校訂 **
記紀歌謠集 武田祐吉校註 **	枕草子(春曙抄) 上 池田龜鑑校訂 **	新古今和歌集 佐佐木信綱校訂 **
風土記 武田祐吉編 **	枕草子(春曙抄) 中 池田龜鑑校訂 **	藤原定家集(附定家年譜) 佐佐木信綱校訂 **
祝詞・壽詞 千田景編 *	枕草子(春曙抄) 下 池田龜鑑校訂 **	新金槐利歌集 新増補 實藤茂吉校訂 **
續日本紀 宣命 倉野靈司編 *	源氏物語(一) 鳥津久基校訂 **	中世歌論集 久松潜一編 **
新萬葉集 上卷 佐佐木信綱編 **	源氏物語(二) 鳥津久基校訂 **	六百番歌合 峯岸巖秋校訂 **
新萬葉集 下卷 佐佐木信綱編 **	源氏物語(三) 鳥津久基校訂 **	六百番歌合 峯岸巖秋校訂 **
白萬葉集 上卷 佐佐木信綱編 **	源氏物語(四) 鳥津久基校訂 **	方丈記 山田孝雄校訂 **
白萬葉集 下卷 佐佐木信綱編 **	源氏物語(五) 鳥津久基校訂 **	松浦宮物語 藤須賀子校訂 *
文萬葉集 下卷 佐佐木信綱編 **	紫式部日記 池田龜鑑校訂 *	保元物語 語岸谷誠一校訂 **
古語拾遺 加藤玄智校訂 *	更級日記 西下鑑一校訂 *	平家物語 上卷 山田孝雄校訂 **
神樂歌・催馬樂 武田祐吉編 **	三條西榮花物語 卷上 三條西公正校訂 **	平家物語 下卷 山田孝雄校訂 **
	三條西榮花物語 卷中 三條西公正校訂 **	東關紀行・海道記 玉井幸助校訂 **

十六夜日記 玉井幸助校訂 ★
 增鏡 和田英松校訂 ★★
 神皇正統記 山田孝雄校訂 ★★
 徒然草 西尾實校訂 ★★
 兼好法師家集 西尾實校訂 ★★
 改訂版 花傳書 野上豐一郎校訂 ★★
 申樂談義 野上豐一郎校訂 ★★
 能作書・覺習條條 野上豐一郎校訂 ★★
 至花道書 野上豐一郎校訂 ★★
 謠曲選集 野上豐一郎校訂 ★★
 お伽草子 鳥津久基編校 ★★
 閑吟集附註 藤田徳太郎校註 ★★
 好色一代男 和田萬吉校訂 ★★
 好色一代女 和田萬吉校訂 ★★
 好色五人女 和田萬吉校訂 ★★
 西鶴談塵 和田萬吉校訂 ★★
 本朝櫻陰比事 和田萬吉校訂 ★★
 武道傳來記 和田萬吉校訂 ★★
 武家義理物語 和田萬吉校訂 ★★

日本永代藏 和田萬吉校訂 ★★
 世間胸算用 和田萬吉校訂 ★★
 西鶴織留 和田萬吉校訂 ★★
 西鶴置土産 和田萬吉校訂 ★★
 奥の細道その他 伊藤松宇校訂 ★★
 芭蕉七部集 伊藤松宇校訂 ★★
 評釋猿蓑 幸田露伴著 ★★
 註芭蕉俳句集 源原退藏校註 ★★
 芭蕉連句集 小宮豐隆編 ★★
 芭蕉書翰集 勝峯晋風編 ★★
 芭蕉花屋日記 小宮豐隆校訂 ★★
 風俗文選 伊藤松宇校訂 ★★
 蕪村七部集 伊藤松宇校訂 ★★
 蕪村俳句集 源原退藏編註 ★★
 松の葉 藤田徳太郎校註 ★★
 松の落葉 藤田徳太郎校註 ★★
 國性 鎌倉三重帷子 和田萬吉校訂 ★★

會我 會稽山 近松門左衛門作 ★★
 心中天の嶺 島和田萬吉校訂 ★★
 會根崎心中 近松門左衛門作 ★★
 用明天皇職人鑑 近藤忠義校訂 ★★
 駿臺雜話 森鷗外校訂 ★★
 衣石田元季校訂 ★★
 雲萍雜志 柳澤洪園著 ★★
 酒落本集 高木好次校訂 ★★
 雨月物語 上田秋成作 ★★
 玉勝間(上) 本居宣長校訂 ★★
 玉勝間(下) 本居宣長校訂 ★★
 玉屋山ふみ 本居宣長校訂 ★★
 鈴屋答問 村岡典與校訂 ★★
 秘本玉くし 村岡典與校訂 ★★
 直毘靈・玉銚百首 本居宣長校訂 ★★
 註良寛詩集 原田勘平校訂 ★★
 新一茶俳句集 萩原井泉水編 ★★
 おらが春・我春集 萩原井泉水校訂 ★★
 遺稿父の終焉日記 萩原井泉水校訂 ★★
 椿説弓張月上卷 和田萬吉校訂 ★★

椿説弓張月 中卷 和田萬吉校訂 ★★
 椿説弓張月 下卷 和田萬吉校訂 ★★
 胡蝶物語 和田萬吉校訂 ★★
 南總里見八犬傳(一) 小池藤五郎校訂 ★★
 南總里見八犬傳(二) 小池藤五郎校訂 ★★
 節木北越雪譜 岡田武松校訂 ★★
 假名手本忠臣藏 竹田出雲作 ★★
 東海道膝栗毛 十返舎一九作 ★★
 柳多留 上卷 西原柳雨校訂 ★★
 柳多留 中卷 西原柳雨校訂 ★★
 柳多留 下卷 西原柳雨校訂 ★★
 浮世風呂 和田萬吉校訂 ★★
 浮世床 和田萬吉校訂 ★★
 萬載狂歌集 野崎左文校訂 ★★
 德和歌後萬載集 野崎左文校訂 ★★
 忍ぶの戀 太田阿彌作 ★★
 縮屋新助 河竹繁俊校訂 ★★
 笠森禮三 仙阿彌作 ★★
 三河竹繁俊校訂 ★★

鼠小僧 河竹繁俊校訂 ★★
 赤垣源藏・仲光 河竹繁俊校訂 ★★
 辨の平右衛門 河竹繁俊校訂 ★★
 實錄先代萩 河竹繁俊校訂 ★★
 孝子善吉 河竹繁俊校訂 ★★
 加賀賀 河竹繁俊校訂 ★★
 日本思潮
 翁問答 中江藤樹著 ★★
 讀史餘論 新井白石著 ★★
 西洋紀聞 新井白石著 ★★
 宮崎農業全書 土屋嘉雄校訂 ★★
 都鄙問答 石田梅巖著 ★★
 手島堵庵心學集 白石正邦編 ★★
 松翁道話 石川謙校訂 ★★
 校道二翁道話 石川謙校訂 ★★
 鳩翁道話 石川謙校訂 ★★

蘭學事始 杉田玄白著 ★★
 經濟要錄 佐藤信淵著 ★★
 一書言志四錄 山田平二校訂 ★★
 古史徵開題記 山田平二校訂 ★★
 報德記 富田高慶述 ★★
 二宮翁夜話 福住正兄重記 ★★
 海舟座談 藤本善治編 ★★
 日本道德論 西村茂樹著 ★★
 講孟餘話 吉田松陰著 ★★
 吉田松陰書簡集 廣瀬豊編 ★★
 福澤撰集 福澤諭吉著 ★★
 文明論之概略 福澤諭吉著 ★★
 福翁自傳 福澤諭吉著 ★★
 寒塞錄 陸奥宗光著 ★★
 兆民選集 中江篤介著 ★★
 一年有半・續一年有半 中江篤介著 ★★
 日本開化小史 田口卯吉著 ★★

内村鑑三隨筆集 内村鑑三著★★
 後世への最大遺物 他二篇 内村鑑三著★★
 清澤文集 集清澤滿之著★★
 綱島梁川集 安倍能成編★★
 入木道三部集 阿 麗校訂★
 歌舞音楽略史 小中村清短述★★
 俗樂旋律考 上原六四郎著★
 論畫四種 坂崎 垣編★
 茶の 本 阿 會 三 著 阿 村 阿 博 譯 ★

現代文學

小説神髓 坪内逍遙著★★
 當世書生氣質 坪内逍遙著★★
 新曲 赫 映 島 阿 内 逍 遙 著 ★
 新曲 赫 映 島 阿 内 逍 遙 著 ★
 鳥たかたの記 他三篇 森 阿 外 作 ★
 ホタ。セクスアリス 森 阿 外 作 ★
 雁 森 阿 外 作 ★

論持院ケ原の歌討 森 阿 外 作 ★
 左千夫歌集 齋藤茂吉選★
 左千夫歌論抄 齋藤茂吉編★★
 濠虚集 夏目漱石著★★
 坊つちやん 夏目漱石著★
 草 枕 夏目漱石著★
 行 人 夏目漱石著★★
 こゝろ 夏目漱石著★★
 硝子戸の中 夏目漱石著★
 道 草 夏目漱石著★★
 明 暗 上卷 夏目漱石著★★
 明 暗 下卷 夏目漱石著★★
 風流佛・一口劔 寺田露伴著★
 五重塔 寺田露伴著★
 太郎坊 他三篇 寺田露伴著★
 子規歌集 正岡子規著★
 墨汁一滴 正岡子規著★★

病牀六尺 正岡子規著★★
 仰臥漫錄 正岡子規著★★
 二人女房 尾崎紅葉著★★
 二入道 遺稿 笹川臨風譯★★
 自然と人生 徳富蘆花著★★
 北村透谷集 尾崎藤村編★★
 觀音岩 前篇 川上眉山著★★
 觀音岩 後篇 川上眉山著★★
 源をぢ 他二篇 國木田獨步著★
 運命論者 他二篇 國木田獨步著★
 號 外 他六篇 國木田獨步著★
 晚翠詩抄 土井晩翠著★★
 蒲團・一兵卒 田山花袋著★
 生 田山花袋著★★
 田舎教 師田山花袋著★★
 あらくれ 徳田秋聲作★★
 藤村詩抄 鳥崎藤村自選★★

千曲川のスケッチ 鳥崎藤村著★
 生ひ立ちの記 鳥崎藤村著★
 櫻の實の熟する時 鳥崎藤村著★★
 飯倉だより 鳥崎藤村著★
 春を待ちつつ 鳥崎藤村著★
 にこり 阿 福 口 一 葉 著 ★
 たけくらべ 阿 福 口 一 葉 著 ★
 高野 聖泉 阿 福 口 一 葉 著 ★
 眉かくしの 聖泉 阿 福 口 一 葉 著 ★
 註文帳・白鷺泉 阿 福 口 一 葉 著 ★
 歌行 燈泉 阿 福 口 一 葉 著 ★
 風流懺法 他三篇 高濱虚子著★
 上田敏詩抄 茅野野々編★★
 有明詩抄 蒲原有明著★★
 赤彦歌集 久保田不二子選★★
 泣菫詩抄 蒲田泣菫著★★
 宣言 言有鳥武郎著★
 入江のほとり 正宗白鳥著★
 生まざりしならば 正宗白鳥著★

長塚節歌集 齋藤茂吉選★★
 腕くらべ 永井荷風作★★
 煤 煙 森 田 草 平 作 ★★
 千鳥 他四篇 鈴木三重吉作★
 桑の 實 鈴木三重吉作★
 和解 或る 男 志 賀 直 哉 著 ★★
 其 姉 或る 女 志 賀 直 哉 著 ★★
 小僧の神様 他十篇 志賀直哉著★★
 白秋詩抄 北原白秋著★★
 白秋抒情詩抄 北原白秋著★★
 海神丸 野上彌生子著★
 大石良雄 野上彌生子著★
 そ の 妹 武者小路實篤著★
 幸福者 武者小路實篤著★★
 人間萬歳 武者小路實篤著★
 友 情 武者小路實篤著★
 銀の匙 中 勳 助 作 ★★
 若山牧水歌集 若山喜志子選★★

波 山本有三著★★
 青銅の基督 長興善郎著★
 陸奥直次郎 長興善郎著★
 出家とその弟子 倉田百三著★★
 布施太子の入山 倉田百三著★
 偷 盜 芥川龍之介著★
 河 童 芥川龍之介著★
 侏儒の言葉 芥川龍之介著★
 西方の人 他二篇 芥川龍之介著★
 續西方の人 他二篇 芥川龍之介著★
 春夫詩鈔 佐藤春夫著★★
 厭世家の誕生 日 佐藤春夫著★★
 (他六篇)

英・米文學

ユートピア (理想郷) トマス・モア著★★
 ベーコン隨筆集 神吉三郎譯★★
 フォーrest博士 松尾 相 譯 ★★
 闘技者サムソン 中村爲治譯★

ブレイク抒情詩抄 壽岳文章譯 *

バーンズ詩集 中村爲治譯 *

湖の麗人 入江直祐譯 *

ラム沙翁物語 野上彌生子譯 *

阿片常用者の告白 田部重治譯 *

イン・メモリアム 入江直祐譯 *

イノック・アーデン テニスン作 *

クリスマス・カロール 森田草平譯 *

爐邊のこほろぎ 本多顯彰譯 *

二都物語 上巻 佐々木直次郎譯 *

二都物語 中巻 佐々木直次郎譯 *

ブラウサウル 藤 勇譯 *

喜劇 論 相良徳三譯 *

エレホン 山本政喜譯 *

ペーター文藝復興 田部重治譯 *

緑の木 蔭 阿部知二譯 *

ハルディ短歌集 森村 豊譯 *

幻想を退み女(他五篇) 森村 豊譯 *

月下の戀劇(他五篇) 森村 豊譯 *

緑の館 村山勇三譯 *

ランブラ博物學者 若田良吉譯 *

はるかな國とはい昔 壽岳しづ譯 *

オ・ヘルン 東西文學評論 十一谷義三郎譯 *

新アラビヤ夜話 佐藤線葉譯 *

寶 鳥 佐々木直次郎譯 *

ジール博士と 岩田良吉譯 *

若い人々のために 若田良吉譯 *

ドリアン・グレイ 西村孝次譯 *

サロメ 佐々木直次郎譯 *

獄中記 阿部知二譯 *

鰥夫の家 市川又彦譯 *

人と超人 市川又彦譯 *

思想の達し得る限り(原名メトセラ時代に歸れ) 相良徳三譯 *

聖女デヨウ(原名メトセラ時代に歸れ) 相良徳三譯 *

(チャンヌ・ダルク) 野上彌一譯 *

颯風(タイフーン) コンラッド作 *

シャーロック ホームズの冒険 菊池武一譯 *

シャーロック ホームズの回想 菊池武一譯 *

ピーター・パン 本多顯彰譯 *

アイルランド電話集 イエイツ編 *

隊を組んで歩く妖精達 山宮 允譯 *

キツプリング詩集 中村爲治譯 *

ジャングルブック キツプリング作 *

争 闘 石田幸太郎譯 *

静寂の宿 本多顯彰譯 *

吾等がために踊れ(他八篇) 龍口直太郎譯 *

アララン 島崎正見譯 *

若き日の 藝術家の自畫像 名原廣三郎譯 *

ユリシーズ(一) 森田名原他四名譯 *

ユリシーズ(二) 森田名原他四名譯 *

ユリシーズ(三) 森田名原他四名譯 *

ユリシーズ(四) 森田名原他四名譯 *

ユリシーズ(五) 森田名原他四名譯 *

マンスフィールド 崎山正毅譯 *

スケッチブック 高垣松雄譯 *

自 然 論 片上 伸譯 *

短篇集 優しき少年(他十篇) 佐藤 清譯 *

緋文 字 佐藤 清譯 *

ワンダ・ブック ホーソン作 *

エヴァンジェリン 齋藤悦子譯 *

ボウ黒猫(他六篇) 森村 豊譯 *

マンツト 草の葉 有島武郎譯 *

王子と乞食 村岡花子譯 *

ねぢの廻轉 富田 彬譯 *

小公 子 若松睦子譯 *

あしなが ちゃん(他五篇) 遠藤 謙子譯 *

おぢさん 本多顯彰譯 *

荒野に生れて 本多顯彰譯 *

地平の彼方 清野 豊一譯 *

賢者ナータン 大庭米治郎譯 *

ファウスト第一部 森 詞外譯 *

ファウスト第二部 森 詞外譯 *

ヘルマンとドロテア 佐藤通次譯 *

若いゾレルの悩み 茅野 龍彦譯 *

ギルヘルム 上巻 久 野 龍彦譯 *

ギルヘルム 下巻 久 野 龍彦譯 *

マイスター 下巻 久 野 龍彦譯 *

たぐみと戀 實吉 隆郎譯 *

ヴレンシュタイン 鼓 常 良譯 *

ヴィルヘルム・テル 櫻井政隆譯 *

ヒュペーリオン ヘルデルリン譯 *

黄金寶壺 石川道雄譯 *

牡猫の生 上巻 秋山六郎兵衛譯 *

牡猫の生 下巻 秋山六郎兵衛譯 *

牡猫の生 觀 下巻 秋山六郎兵衛譯 *

影を失くした男 井汲越次譯 *

全グリム童話集 第一 金田 鬼一譯 *

全グリム童話集 第二 金田 鬼一譯 *

全グリム童話集 第三 金田 鬼一譯 *

全グリム童話集 第四 金田 鬼一譯 *

全グリム童話集 第五 金田 鬼一譯 *

全グリム童話集 第六 金田 鬼一譯 *

全グリム童話集 第七 金田 鬼一譯 *

ゲニテの對話抄 エツケルマン著 *

ハルツ紀行 内 藤 匡譯 *

みづうみ他三篇 關 泰祐譯 *

三色菫・溺死 伊藤武雄譯 *

村のロメオとユリア 草間平作譯 *

迷 路 伊藤武雄譯 *

僧の婚禮 伊藤武雄譯 *

忘れられぬ言葉 淵田一雄譯 *

埋 木 森 隆 外譯 *

アルト 番匠谷英一譯 *

沈 鐘 阿部六郎譯 *

日の出 前 橋本忠夫譯 *

獨・塊文學

ソアーナの異教徒 ハウプトマン作 ★★
 希臘の春 城田皓一譯 ★★
 改春の目ざめ 野上豊一郎譯 ★★
 惡童物語 實吉捷郎譯 ★★
 ブツデン (一) 成瀬無極譯 ★★
 ブツデン (二) 成瀬無極譯 ★★
 ブツデン (三) 成瀬無極譯 ★★
 ブツデン (四) 成瀬無極譯 ★★
 トオマス・マン短篇集1 實吉捷郎譯 ★★
 トオマス・マン短篇集2 實吉捷郎譯 ★★
 トオマス・マン短篇集3 實吉捷郎譯 ★★
 青春彷徨 (ベーク・カ) ヘルマン・ヘッセ作 ★★
 平 行 久保菜津子譯 ★★
 ジャクリースと 人 相良守峯譯 ★★
 祖 妣 岡本龍助譯 ★★
 維納の辻音楽師 グリルバルツエル作 ★★
 海の波 戀の波 若匠谷英一譯 ★★

み れ ん シュニツツル作 ★★
 アナトール 小宮豊隆譯 ★★
 戀愛三昧 森岡外郎譯 ★★
 緑の鸚鵡他一篇 茅野蕭々譯 ★★
 佛・白文學
 ポリウクト コルネイユ作 ★★
 人間嫌 ひ 關口存男譯 ★★
 クレーヴの奥方 ラファイエット夫人作 ★★
 愛と偶然との戯れ 進藤誠一譯 ★★
 マノン・レススコオ ア・ペレウオ作 ★★
 懺悔録 上巻 石川巖蔵譯 ★★
 懺悔録 中巻 石川巖蔵譯 ★★
 懺悔録 下巻 石川巖蔵譯 ★★
 ボオルとザイルジニイ サ・ドニール作 ★★
 アドルフ 大塚幸男譯 ★★
 ダール赤と黒上巻 生島遼一譯 ★★

スタン 赤と黒下巻 桑原武夫譯 ★★
 パルムの僧院上巻 前川堅市譯 ★★
 パルムの僧院下巻 前川堅市譯 ★★
 カストロの尼 桑原武夫譯 ★★
 戀愛論 上巻 前川堅市譯 ★★
 戀愛論 下巻 前川堅市譯 ★★
 從兄ポンス 前篇 水野亮譯 ★★
 從兄ポンス 後篇 水野亮譯 ★★
 知られざる傑作 水野亮譯 ★★
 海邊の悲劇他三篇 水野亮譯 ★★
 レ・ミゼラブル (一) ユーゴー著 ★★
 レ・ミゼラブル (二) ユーゴー著 ★★
 レ・ミゼラブル (三) ユーゴー著 ★★
 レ・ミゼラブル (四) ユーゴー著 ★★
 レ・ミゼラブル (五) ユーゴー著 ★★
 レ・ミゼラブル (六) ユーゴー著 ★★
 アンヂアナ上巻 杉達夫譯 ★★

愛の妖精 ヨルジュ・サント作 ★★
 エトルリアの壺 (他五篇) 杉捷夫譯 ★★
 コロンバ 杉捷夫譯 ★★
 カルメン 杉捷夫譯 ★★
 屋根裏の哲人 スウエニストル作 ★★
 夢と人生 佐藤正彰譯 ★★
 椿 姫 デュマ・フィス作 ★★
 ブチ・ショウズ 八木さわ子譯 ★★
 陽気なクルタラン 小川泰一譯 ★★
 風車小屋だより 櫻田一徳譯 ★★
 月曜物語 櫻田一徳譯 ★★
 聖母と輕業師 (他四篇) 大井征譯 ★★
 少年少女 アナトール・フランス作 ★★
 昔がたり アナトール・フランス作 ★★
 神々は渴く アナトール・フランス作 ★★
 ノア・ノア 前川堅市譯 ★★
 過 去 岸田國士譯 ★★

氷島の漁夫 ビエル・ロチ作 ★★
 お菊さん 野上豊一郎譯 ★★
 女の一生 杉捷夫譯 ★★
 生の誘惑 (原名イヴ) モウパッサン作 ★★
 頸飾 (他七篇) 前田晁譯 ★★
 ビエルとジャン 前田晁譯 ★★
 水のの上 吉江藩松譯 ★★
 別れも愉し他一篇 岸田國士譯 ★★
 ジャン (一) 豊島與志雄譯 ★★
 ジャン (二) 豊島與志雄譯 ★★
 ジャン (三) 豊島與志雄譯 ★★
 ジャン (四) 豊島與志雄譯 ★★
 ジャン (五) 豊島與志雄譯 ★★
 ジャン (六) 豊島與志雄譯 ★★
 ジャン (七) 豊島與志雄譯 ★★
 ジャン (八) 豊島與志雄譯 ★★
 愛と死との戯れ 片山敬彦譯 ★★

獅子座の流星群 片山敬彦譯 ★★
 パリニウド 小林秀雄譯 ★★
 鎮を離れたプロメテ 河上徹太郎譯 ★★
 背徳者 川口篤譯 ★★
 法王廳の抜穴 石川巖蔵譯 ★★
 田園交響樂 川口篤譯 ★★
 シイソヴエト旅行記 小松清譯 ★★
 短篇集 小きき町にて 淀野隆三譯 ★★
 若き日の手紙 外山樞夫譯 ★★
 母への手紙 三好達治譯 ★★
 青い鳥 若月繁蘭譯 ★★
 露西亞文學
 オネーギン プーシキン作 ★★
 スペードの女王 ブーシキン作 ★★
 イワニン・イワイフキツチ ゴーゴリ作 ★★
 キツチとが喧嘩をした話 原久一郎譯 ★★
 外 套 (他二篇) ゴーゴリ作 ★★

資本論初版鈔 マルクス著 長谷部文雄譯 ★★
 賃労働と資本 マルクス著 長谷部文雄譯 ★★
 賃銀・價格および利潤 マルクス著 長谷部文雄譯 ★★
 フランスに 於ける内亂 マルクス著 木下平治譯 ★★
 マルクス 猶大人問題を論ず 久野龍溪譯 ★★
 改訂 家族、私有財産及 エンゲルス著 西野雄譯 ★★
 住宅問題 エンゲルス著 加田哲二譯 ★★
 エンゲルスの空想より科學へ 淺野 晃譯 ★★
 道徳の經濟的基礎 ショウウヰンガイ著 草間平作譯 ★★
 經濟的財價值 ボーム・パウエル著 長守善譯 ★★
 資本論解説 カウツキー著 大里傳平譯 ★★
 マックス・社會科學方法論 富永祐治譯 ★★
 職業としての學問 ウエーバー著 尾高邦雄譯 ★★
 經濟學入門 ローゼンブルグ著 佐野文夫譯 ★★
 資本論精論 上巻 ローゼンブルグ著 長谷部文雄譯 ★★
 資本論精論 中巻 ローゼンブルグ著 長谷部文雄譯 ★★
 資本論精論 下巻 ローゼンブルグ著 長谷部文雄譯 ★★

資本論精再論 ローゼンブルグ著 長谷部文雄譯 ★★
 マルクス・ブルグの手紙 ルイゼ・カウツキー編 松井圭子譯 ★★
 戦争論 上巻 馬込健之助譯 ★★
 戦争論 下巻 馬込健之助譯 ★★
 エンゲルスの原始基督教史考 喜多野清一譯 ★★
 カウツキーの基督教の成立 喜多野清一譯 ★★
 フツサ 労働者綱領 小泉信三譯註 ★★
 暴力論 上巻 木下平治譯 ★★
 暴力論 下巻 木下平治譯 ★★
 ベル婦人論 上巻 草間平作譯 ★★
 ベル婦人論 下巻 草間平作譯 ★★
 婚姻の諸形式 ミユラー・リヤ著 木下史郎譯 ★★
 戀愛と結婚 上巻 エレン・ケイ著 原田 實譯 ★★
 戀愛と結婚 下巻 エレン・ケイ著 原田 實譯 ★★
 マルクス・エンゲルスの傳 リアザノフ著 長谷部文雄譯 ★★
 レーロシアにおける上 大山岩雄譯 ★★
 ニン 資本主義の發展卷 西 大山岩雄譯 ★★
 ニン 資本主義の發展卷 西 大山岩雄譯 ★★
 ニン 何を爲すべきか 平田良福譯 ★★

カール・マルクス (他五篇) レーニン著 伊藤 弘譯 ★★
 レーニンのゴオリキーへの手紙 中野重治譯 ★★
 シー帝國主義 長谷部文雄譯 ★★

岩波文庫に就て

□岩波文庫は普及を第一義として刊行する廉價版であります。
 □内容の厳選 東西古今の古典並に價値高い良書を續々刊行、網羅せしめ、校訂、翻譯に於て、また校正、印刷、製本等に於ても最善の注意を拂つてみます。
 □最低の廉價 定價は専ら低廉を旨とし、四角な内容を小さい形の中に収める形式を採つてみます。
 □購求の自由 預約出版ではありませんので、讀者は何時でも自由に欲しいものを選択購求することが出来ます。全國の書店に取揃へてあります。
 □携帶の至便 平福百穂畫伯の装幀による菊半截判で、體裁は極めて適洒、旅行その他の伴侶に至便であります。
 □解説附目錄 岩波文庫の各書について解説を附した分類總目錄があります。

御巾込み次第早速お送り申上げます。
 □定價は便宜上星(★)数を以て現はし、★一つが二十錢であります。定價と送料とを表にしますと大體次のやうになります。
 ★ 定料二十錢 送料三錢
 ★★ 四十錢 六錢
 ★★★ 六十錢 九錢
 ★★★★ 八十錢 十錢
 ★★★★★ 一圓 十錢
 星数はまた頁数をも現はし、★一つは大體百頁乃至百五十頁であります。
 □御註文は、すべて前金でお願い致します。著者名・書名・巻数・冊数及び御住所氏名を楷書で明記の上、代金に必ず送料を添へてお送り願ひます。
 □御送金には「振替東京二六二四〇番」の御利用が最も安全で簡便であります。爲替で御送金頂いても結構であります。また切手代用の場合には一箇地に願ひます。

最新刊書

ペーター文藝復興 田部重治譯 ★★

腕くらべ 永井荷風作 ★★

少年少女 フナトール・フランス 三好達治譯 ★

蜜蜂 マアヤ ボンゼルス作 實吉捷郎譯 ★★

アンヂアナ 下巻 ジョルジュ・サンド 杉捷夫譯 ★★

笛師のむれ 上巻 ジョルジュ・サンド 宮崎嶺雄譯 ★★

カントとマルクス 上巻 フォアレンダー著 井原紘譯 ★★

社會再組織の科學的基礎 コント著 飛澤謙一譯 ★

南總里見八犬傳(三) 曲亭馬琴作 小池藤五郎校訂 ★★

ウエイクフィールドの牧師 ゴールドスミス作 神吉三郎譯 ★★

ドミニック フロマンタン作 市原豊太譯 ★★

ロテイの結婚 ビエル・ロテイ作 津田穰譯 ★★

キリスト教の本質 下巻 フォイエルバツハ 船山信一譯 ★★

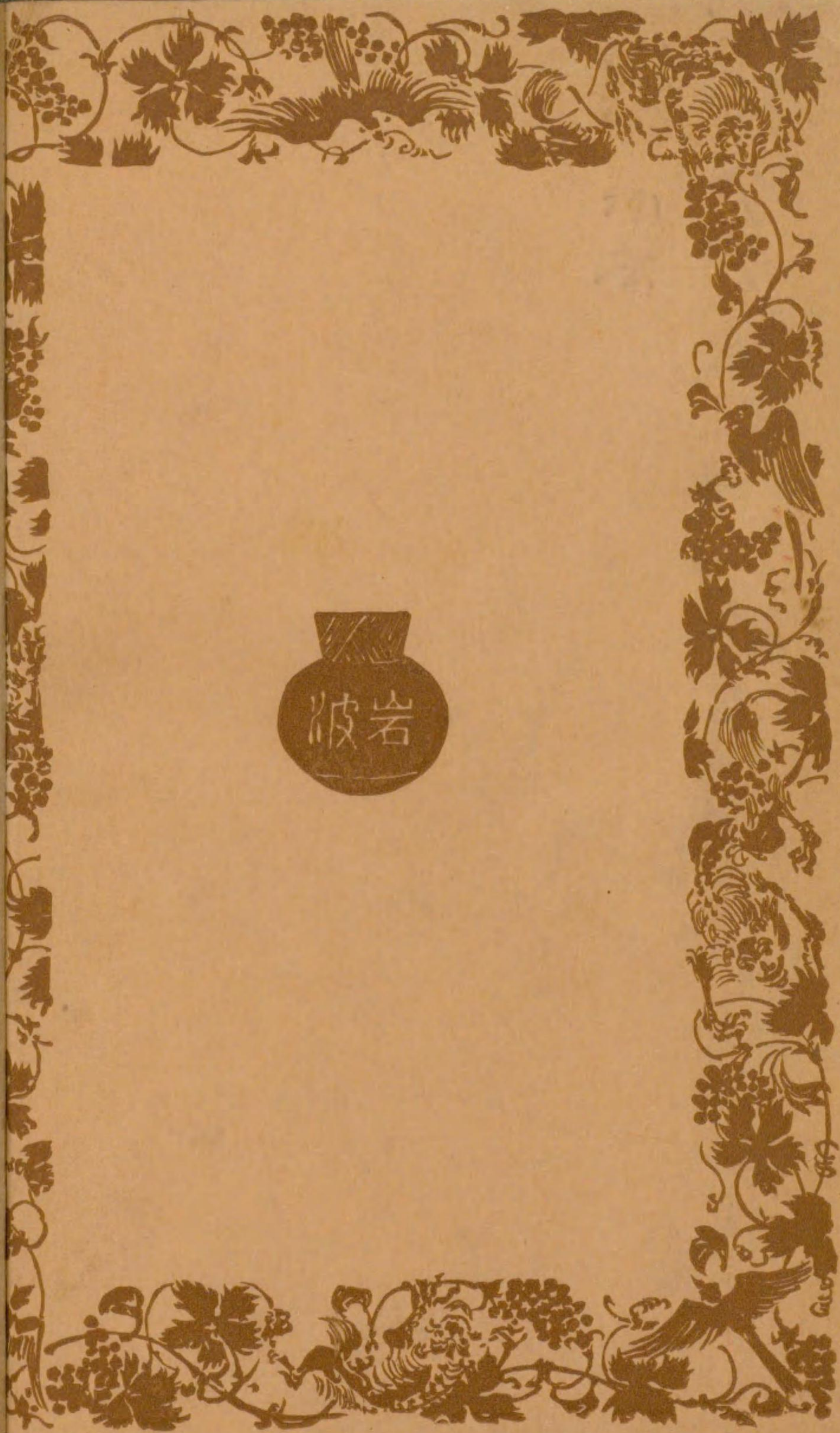
レ・ミゼラブル(七) ユーゴー著 豊島與志雄譯 ★★

白馬の騎手 他一篇 シュトルム作 茅野蕭々譯 ★★

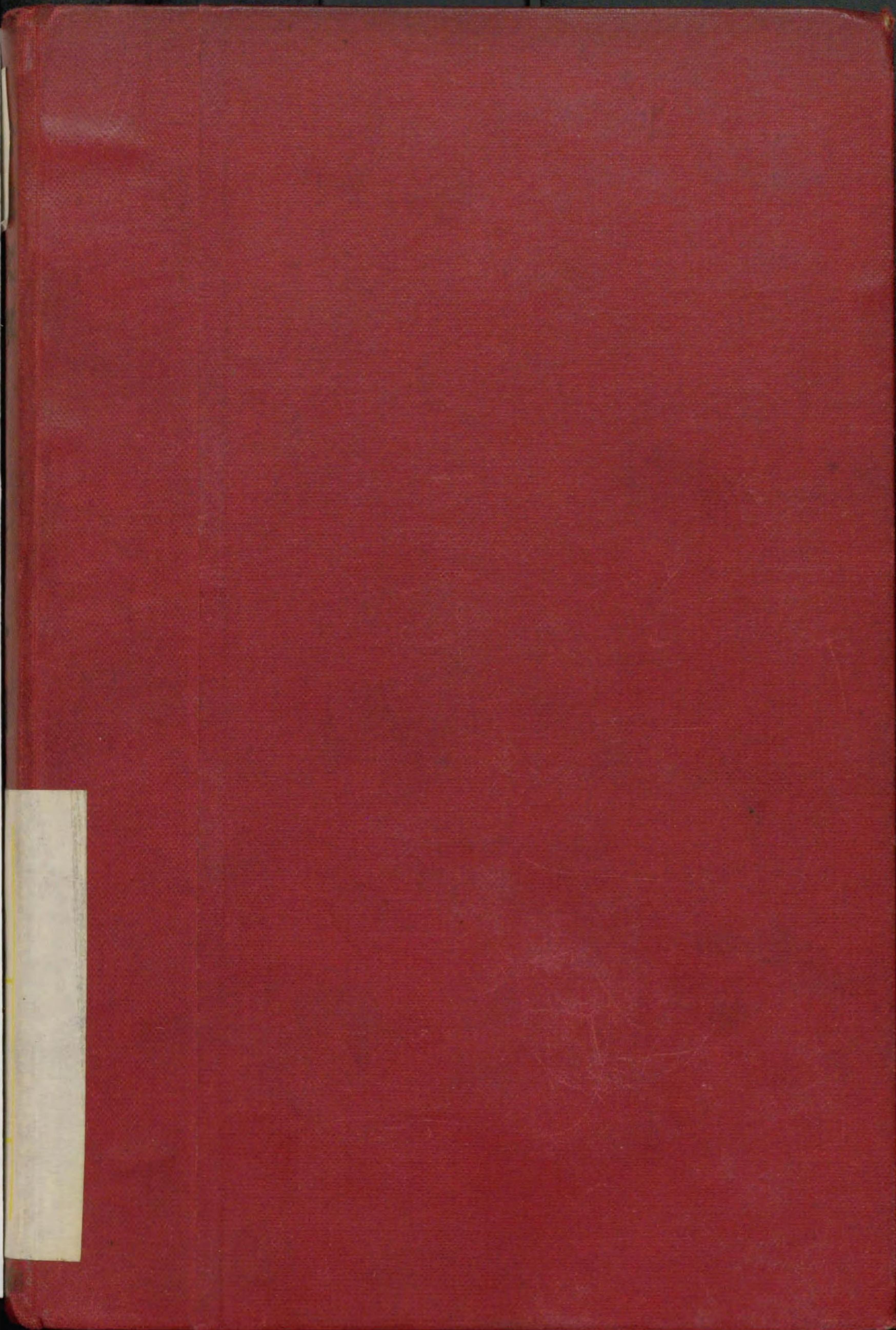
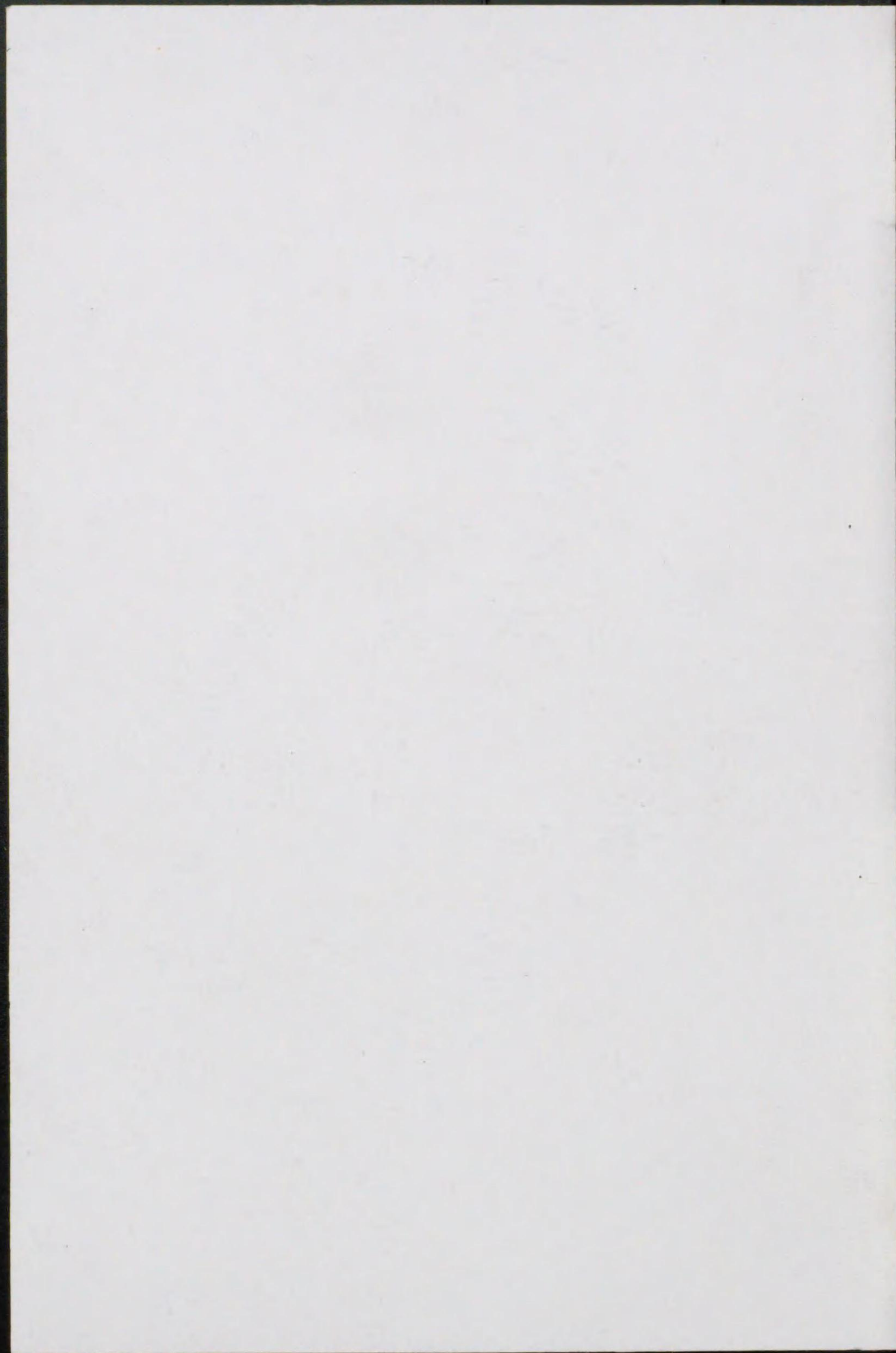
失はれた笑ひ ケラー作 中村政雄譯 ★

かくれんぼ・白い母 他二篇 ソログロップ作 中山省三郎譯 ★

5
1



569
14

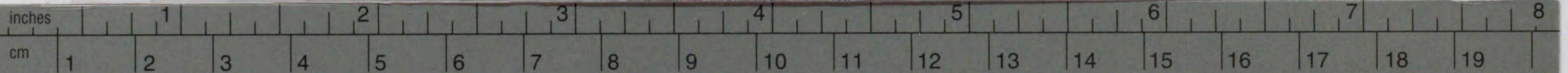


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

